緒立Ｃ遺跡発掘調査概報

１９９３.３

黒埼町教育委員会

序

このたび、昭和63年から始まりました緒立土地区画整理組合の事業実施に伴って、同組合の委託によって緒立Ｃ遺跡を中心とした発掘調査を当教育委員会が実施いたしました。

承知のとおり、緒立地域は、隣接している新潟市的場地域と共に縄文時代から弥生、古墳時代、及び奈良・平安時代にかけて古代の遺跡が幅広く残されている地域であり、この遺跡の調査は的場遺跡の発掘調査とならんで行われ、それぞれに予想を超える成果を得て調査を終了することができたと思うのであります。

特に、和島村における国道116号線のバイパス工事中に発見されて、大きな反響を県民に与えた八幡林遺跡とのつながりを含めて、古代におけるわが新潟県に当時の姿を探るために、極めて多くの成果を得るに足りる調査を行い得たものと思います。

本書で報告する内容は、まだ整理がおわっていない概報的なものでありますが、緒立Ｃ遺跡に含まれる緒立公園部分の確認調査もあわせて報告するものであり、郷土の古代を探訪する一助となれば幸いと思います。

終りに調査の実施に数多くの便宜と御援助を賜りました緒立土地区画整理組合並びに地元関係者各位、発掘に従事された有志の方々に対し心から感謝申しあげる次第であります。

平成５年３月

黒埼町教育委員会

教育長　青　木　昭　平

例　　言

1．本報告書は新潟県西蒲原郡黒埼町字川根潟5474番地他に所在する緒立C遺跡の発掘調査の概報である。

2．調査は緒立土地区画整理組合の土地区画整理事業に伴う事前調査として、同組合から黒埼町が委託を受け、町教育委員会が調査主体となって実施した。調査期間は、平成元年9月25日～12月4日、同2年4月3日～11月9日で調査体制は以下のとおりである。

調査主体	黒埼町教育委員会(教育長　元～2年　宮田兼好、2年　青木昭平)		
総　　括	高橋石男(社会教育課長)	調査補助員	戸根富美江、布川忠一
調査担当	野田　能(社会教育課主事)	事　　務	青木正夫(社会教育課係長)
調　査　員	渡辺ますみ(社会教育課主事)	調査作業	地元有志

3．出土遺物は一括して、黒埼町教育委員会が保管している。遺物の註記は「オタテC」としてある。

4．本書には(付編)として平成3年5月13日～5月15日におこなった緒立C遺跡(公園地)確認調査もあわせて掲載している。

5．調査結果は現在整理途上にあるため、本書は主要時期の遺構を中心に特徴的な資料の掲載にとどまった。

6．方位は真北、レベルは標高を示した。真北は磁北から東偏約7度である。土器の断面は土師器を白抜き、須恵器を黒塗りで示した。スクリントーンについては本文中で説明した。スケールは図版中に入れた。

7．今回の実測遺物については、写真を掲載していない。よって実測番号と写真番号は一致しない。

8．地形図のうち第2図、第3図は黒埼町編の基本図を用いた。

9．奈良～平安時代の土器の時期・産地鑑定は県文化財専門員の春日真美氏に御教示いただいた。また木簡の釈文は国立歴史民俗博物館の平川南氏によるものであり、関連資料については新潟大学の小林昌二、熊田亮介両氏に御教示いただいた。

10．発掘調査現場作業は地元有志の協力を得た。整理、報告作業は調査員を中心として役場分室発掘調査整理室で実施した。出土遺物の水洗、註記、復元は品川由紀子・保苅優子・山際静が、実測は佐々木陽子・戸根富美江、写真撮影は渡辺ますみ、トレースは大野祐子・中澤礼子が行った。

11．本報告書の執筆は、すべて渡辺が担当し編集した。

12．発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御指導御協力を賜った。厚く御礼申しあげます。(敬称略)

甘粕　健・川村浩司・小池邦明・坂井秀弥・品田高志・高橋　保・高橋保雄・田中耕作・田辺早苗・鶴巻康志・戸根貴之・戸根与八郎・中島栄一・藤塚　明・藤巻正信・本間桂吉・渡邊朋和・緒立土地区画整理組合・石附組・原甚建設・福田・丸運・水倉・JV

目　　次

I　調査に至る経緯 …… 1

II　遺跡の位置と周辺の環境 …… 2

III　調 査 の 概 要 …… 3

1．調査の方法と経過 …… 3
2．遺跡の概要 …… 4

IV　主要時期の遺構・遺物 …… 6

1．古 墳 時 代 …… 6
2．奈良～平安時代 …… 7

V　ま　と　め …… 23

引用・参考文献 …… 24

（付　　編）

緒立C遺跡公園地　確認調査(1991年)報告

図 版 目 次

図版1　遺跡近景(北東から)　No. 342(円形周溝墓)　No. 150(古墳・竪穴住居)
図版2　No. 164(古墳・竪穴住居)　No. 439(古墳・竪穴住居)　No. 550(古墳・竪穴住居)
図版3　No. 526(古墳・溝状遺構)杭列(奈良～平安)　94A一括(古墳・土器集中部)　掘立柱建物群(東より)
図版4　SB 2　SB 1・3・5　SB 4
図版5　土器溜り1(平安時代)　No. 22(奈良～平安・井戸)　No. 22(奈良～平安・井戸)
図版6　古式土師器1
図版7　古式土師器2
図版8　古式土師器3
図版9　1．木製品(奈良～平安時代)　2．左・土　錘　3．右・紡錘車(奈良～平安時代)　4．左・石　錘　5．中央上・サイコロ　6．中央下・『和銅開珎』　7．右・銙帯(帯金具)(奈良～平安時代)

図版10　人面墨書土器・木簡
(付編)図版１　遺跡近景(南から)　試掘坑 No.１土層　試掘坑 No.３土層
(付編)図版２　１．古式土師器　２．須 恵 器　３．左・土師器(奈良～平安時代)
４．右上・墨書土器拡大　５．右下・土　錘　６．木製品(中世)

挿　図　目　次

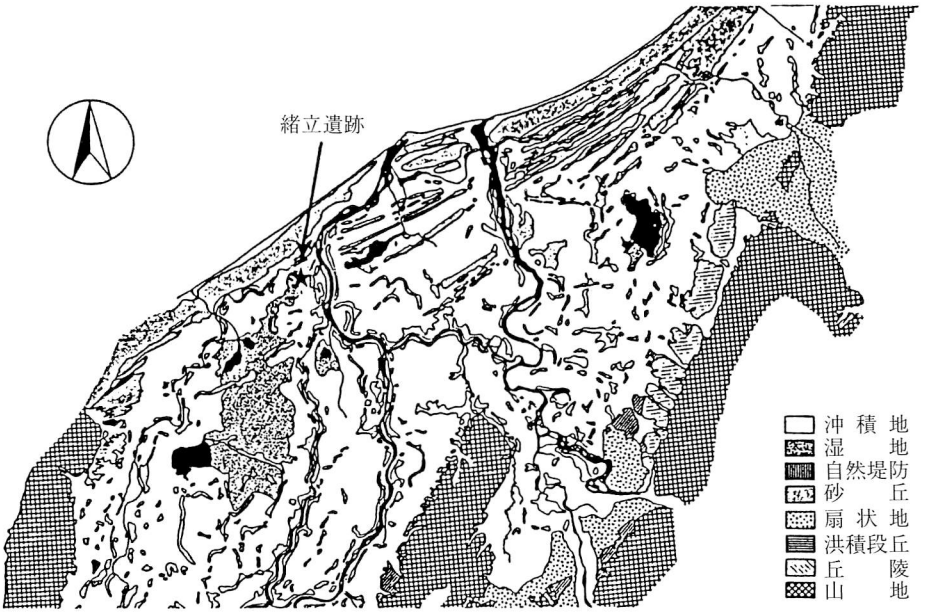
第１図　周辺の地形(『新潟県史　通史編１原始・古代』1986より) …… 1
第２図　遺跡周辺図(黒埼町編１：10,000の地図を使用) …… 2
第３図　地形測量とグリット設定図(1/800) …… 3
第４図　古墳・奈良～平安時代遺構配置模式図(1/500) …… 5
第５図　遺物分布図(1/1,000) …… 10
第６図　サイコロ実測図(1/1) …… 11
第７図　遺構実測図(第４図ブロック１) …… 12
第８図　遺構実測図(第４図ブロック２) …… 13
第９図　遺構実測図(第４図ブロック３) …… 14
第10図　遺構実測図(第４図ブロック４) …… 15
第11図　遺構実測図(第４図ブロック５) …… 16
第12図　遺構実測図(第４図ブロック６) …… 17
第13図　遺構実測図(第４図ブロック７) …… 18
第14図　遺物実測図(No.440遺構) …… 19
第15図　遺物実測図(No.440遺構) …… 20
第16図　遺物実測図(土器溜り１) …… 21
第17図　遺物実測図(土器溜り1 64～66・No.529遺構67～72) …… 22
(付編)図版１　確認調査地点(1/5,000) …… 2
(付編)図版２　試掘坑設定図(1/800) …… 3
(付編)図版３　土層柱状図(1/40) …… 4
(付編)図版４　遺物実測図(1/4) …… 5
(付編)図版５　遺跡範囲の推定図(1/800) …… 6

表　目　次

(付編)表　出土遺物一覧表 …… 5

Ⅰ　調査に至る経緯

北東に流通団地をひかえる当地域は、西バイパス建設計画などの環境整備がすすむなかで、開発を望む声が高まっていた。昭和59年１月、的場・緒立土地区画整理組合設立準備発起人会により土地区画整理事業計画が示されたが、開発予定地内に周知の緒立Ｃ遺跡が存在するためその取扱いについて協議されることになった。協議には県教育委員会・町教育委員会・開発事業者が出席し、第一に遺跡について詳細なデータを得るための確認調査が必要であるとの見解が出された。町教育委員会では、昭和61年、国庫補助金・県費補助金交付を受け、11月４日～11月14日、県教育委員会職員の指導のもとで確認調査を行った。この調査で、大字黒鳥5477～5486のうちの約5,400㎡の範囲が遺跡であることが判明した。再び、県教育委員会・町教育委員会・開発事業者による協議がもたれたが、開発を変更することはむずかしく、記録保存が必要な範囲について本格調査をおこなうという基本ラインが示される。その後重ねられた協議のなかで、都市計画法による３％の緑地(公園)を遺跡の一部に設けて現状保存とし、それを除いた開発にかかる遺跡範囲について発掘調査を実施することになった。調査予定面積は約4,500㎡。町教委は委託を受け、２ケ年にわけて調査を行うことにした。この段階での調査実施計画は、発掘が平成元年９～11月・平成２年４～10月、整理作業および報告書作成が発掘中断期間と発掘終了後から平成４年度報告書刊行までというものであった。平成元年受託契約が締結され、同年９月25日に発掘調査を開始する。

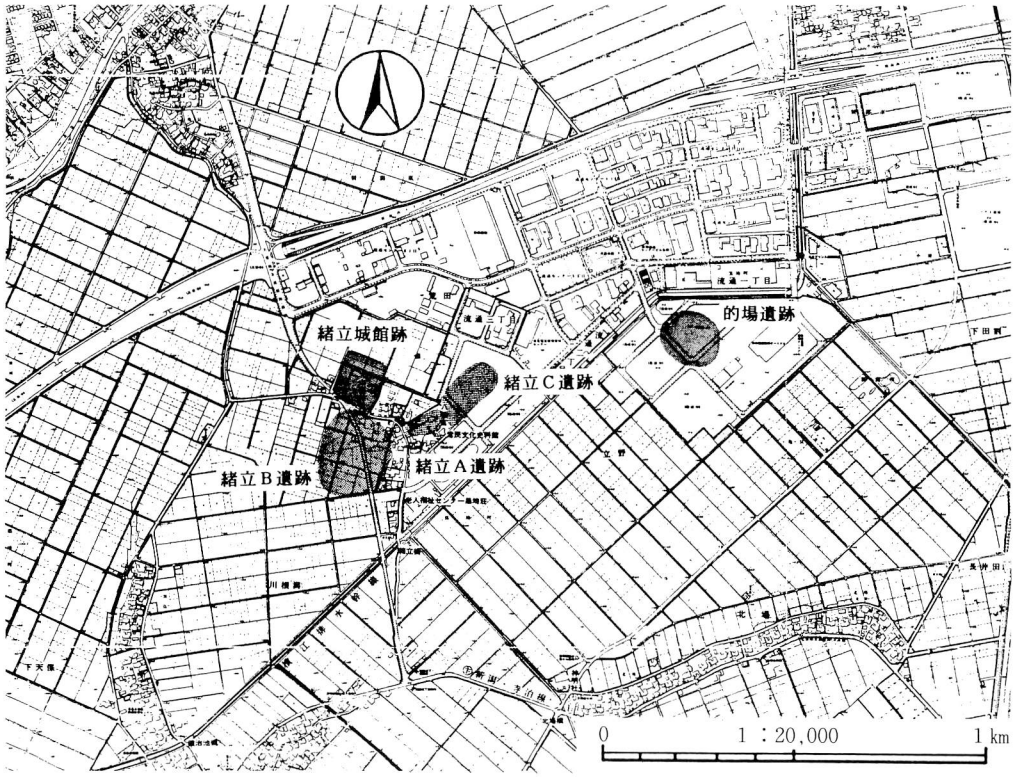


第１図　周辺の地形(『新潟県史 通史編１ 原始・古代』1986より)

II　遺跡の位置と周辺の環境

遺跡の位置する黒埼町は、海岸沿いに発達した新砂丘列と信濃川の間に位置している。このあたり一帯は、砂丘の内陸側に形成された後背湿地と大小河川の氾濫による広大な湿地帯となっており、つい最近まで的場潟をはじめとして数多くの潟湖が点在していた。そのなかで、信濃川が作った自然堤防や砂丘は微高地となって、集落が形成されるようになる。緒立遺跡が存在する緒立集落も自然堤防上に形成されたものであるが、遺跡はその集落の北西―南東という広がりを横断するようなかたちでみられる。遺跡は海岸線にほぼ平行に走る埋没砂丘上に存在していた。その砂丘は起状をもち、ところどころ標高が高くなるところで遺構の集中がみられる。緒立遺跡はそのような高まり(遺構の集中範囲)にA・B・Cと地点名が付けられている。

本遺跡の南西に、4～5世紀初めの円墳(径30mで葺き石をもつ)と推定される緒立A遺跡が隣接し、さらにその先に縄文時代晩期～平安時代の集落跡が検出された緒立B遺跡がある。また、北東約700mの地点には、同じ開発に伴う調査で本遺跡との関連性が指摘されている古墳・奈良～平安時代の新潟市・的場遺跡がある。この遺跡もまた、緒立遺跡と同一か、あるいは隣接した砂丘列上に位置するものである。



第2図　遺跡周辺図(黒埼町編1：10,000の地図を使用)

III 調査の概要

1．調査の方法と経過

昭和61年に行われた確認調査の結果で、南北約90m・東西約60mの約5,400㎡が遺跡の範囲であることが判明しており、このうちの開発にかかる範囲が発掘調査対象地である。ただし、約2,400㎡の公園地は、遺跡現状保存が前提の整備となるため、今回の調査範囲からはずれている。調査予定面積は水路部分をいれて約4,500㎡である。

グリッドの設定　確認調査では黒埼常民文化史料館東側農道十字路を基準にして、一辺15mのグリッドが設定されたが、本調査では遺物の出土量を考えて、小グリッドを一辺２mのマス目にするため大グリッドは一辺10mを単位とした。ただし、グリッドの方向はそのままとし、グリッドラインも、確認調査の２・４・６・８とB・D・Fに重なる。グリッドの方向はアルファベッドラインが、真北より47°3′8″東偏する。さらに、このグリッドを25等分する一辺２mの小グリッドを設け、「A１－１」と表記した。

調査の方法と経過　調査地周辺は、標高０mあるいはマイナス地帯である。調査開始時には作付けが停止したあとの荒野となっていた。低湿地遺跡では、湧水・流水や遺跡が深いことに対する安全対策などが問題となるが、今回は、調査地の周辺を法面にし、外周に法面保護を兼ねた柵渠工を施すことになった。法勾配は１：２、柵渠工は包含層より約50cmほど低く掘り下げ、集水したものをポンプアップするというものであった。この工事は確認調査の結果をもとに図面がひ

第３図　地形測量とグリッド設定図(1/800)

かれ業者がおこなったが、遺跡の状態に合わない状況もでてきたため、２年目の施工では大幅な施工変更もおこなっている。

調査は基本的には、遺物包含層の上までバックフォーで除去し、以下は人力による掘削になる。本遺跡では、包含層が黒褐色砂１層となっているが、場所によってその直上に中世遺物を出土する砂混じりの灰色粘質土が薄く堆積していたり、また包含層の上部に腐食植物を多量に含むところがみられるため、「掘り下げ→精査」は面を下げていく段階で３面行っている。しかし、30～100cmという包含層の厚さにもかかわらず、中世以外については遺物を層位的に分離することは不可能であり、包含層中にプランがおさまる遺構についても検出が容易ではないという状況であった。包含層遺物は小グリッドごとに、また遺構出土遺物は一括で取り上げたが、遺構が識別できなくても遺物集中がみられた場合には、必要に応じて図面に記録した。

標高の低い地点から調査を進めるということで、１年目(平成元年)は調査区の北東部分を着手することになった。この年は排水が失敗し、縁辺の低地部は水を排出しきれなかったため、手探り的な作業をやらざるをえない地点もあった。遺構は、次年度調査範囲に続く標高の高い地点でいくつか検出されたほか、土器捨て場と思われる遺物集中がみられた程度で、９月下旬に開始し約２ケ月半で終了した。平成２年の調査は４月下旬から行われたが、遺構が全域にかけてみられるということ、包含層が厚く遺物の出土量が多いことにより、開発事業者側が最終的に示した10月終了を１～２週間超過することになった。調査期間中は県専門職員の派遣や他市町村専門職員の助言をいただくことができ、大きな成果が得られた。また、平成２年10月21日には現地説明会をおこない、一般の人たちの遺跡への関心・理解を得ることができた。

整理作業は、役場分室で町教育委員会社会教育課が行っており、現在も続いている。作業が途中のものも多いため、整理作業内容については省略した。

２．遺 跡 の 概 要

本遺跡は、縄文時代晩期・古墳時代前期・奈良～平安時代・中世が認められる複合遺跡である。各時代とも遺構が検出された。前述したように、「掘り下げ→精査」は３面行っているが、中世と奈良・平安時代の一部以外は、ほとんど同一面(最下面)で検出されている。

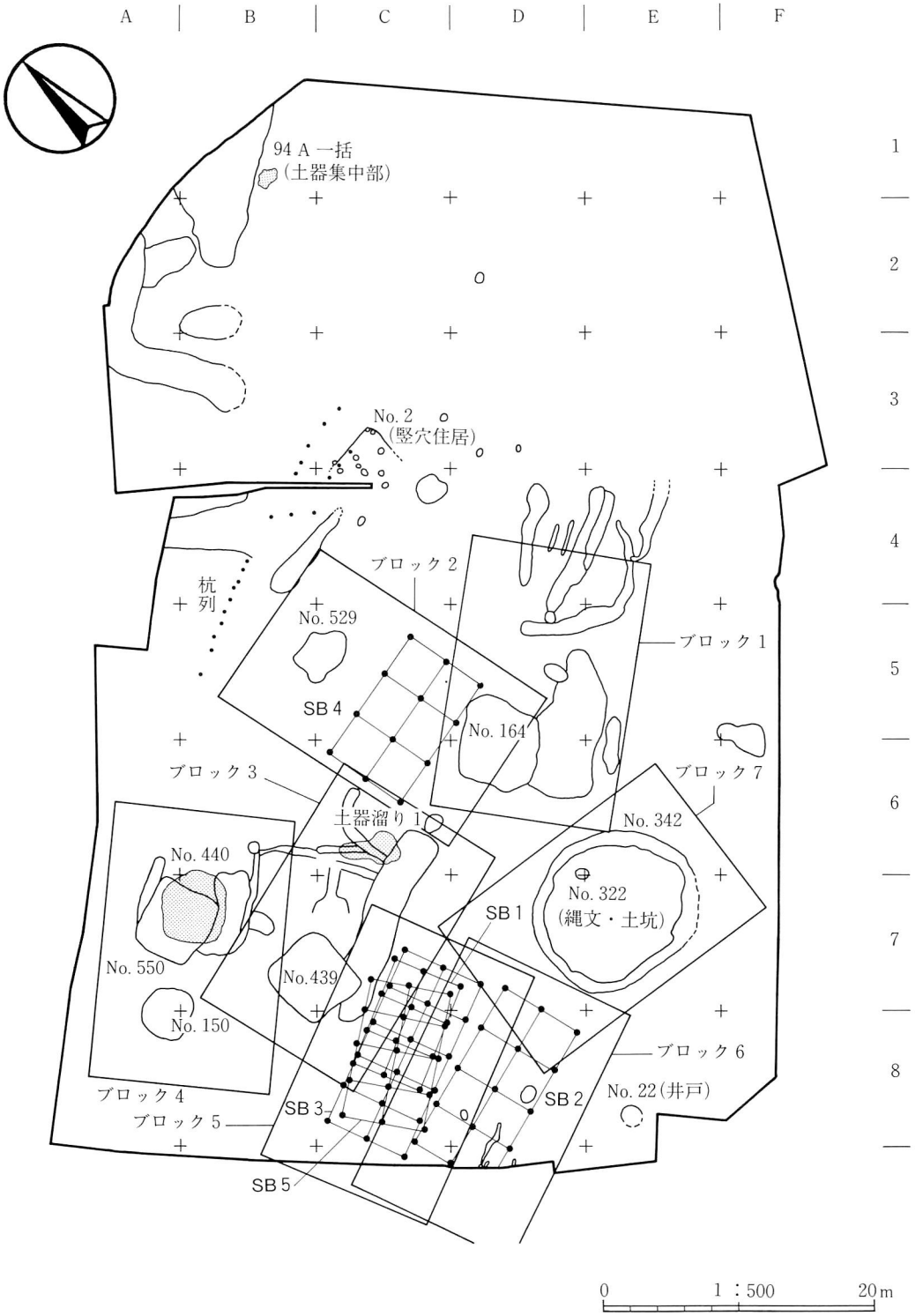
遺構は各時代とも砂丘頂部－2.2～－3.3ｍの範囲に分布しており、特に北側緩斜面に生活の痕跡が顕著である。ただし、ほとんど勾配がないところでも低地部には住居などがみられず、そこが湿地・沼など水辺であったと考えられる。

縄文時代晩期　土坑が２基検出され、包含層からテンバコ３箱分の遺物が出土している。

古墳時代前期　竪穴住居を主体とした古墳時代前期の集落跡である。

奈良～平安時代　掘立柱建物を主体とした８世紀半ば～９世紀第３四半期の集落跡である。

中世　14世紀の墓坑群が検出されている。



第 4 図　古墳・奈良～平安時代遺構配置模式図(1/500)

IV　主要時期の遺構・遺物

前章で述べたように、緒立C地点における人間の営みは多時期にわたっているが、本章では主要時期である古墳時代前期と奈良～平安時代について、おもな遺構と遺物を紹介する。

今回、遺構名は基本的には現場で付与した通し番号(遺物註記と一致)を使ったが、掘立柱建物は机上で棟ごとにSB１～５をあたえた。また、遺構のスクリーントーンについては網点が土器の集中を表わし、砂目(粗目)が焼土を表わす。また、遺物のスクリーントーンについては密な網点がスス・墨を、粗な網点が朱・赤彩を表わす。

１．古墳時代

検出された遺構は、竪穴住居５、円形周溝墓？１、溝状遺構３、土坑などである。この他に土器捨て場的な広範囲の土器集中がみられる。前者は調査区の中央やや東よりのところから西方にかけた地域でみられ、概ね標高－2.2～－3.4ｍの範囲で存在する。これに対し後者は調査区北側の標高の低いところに拡がっている。各遺構の時期について、詳しい検討を加えていないが、ほとんどが前期の前半におさまるものである。

遺物は、テンバコ約360箱ほどである。このうちの半分ほどは砂丘北側斜面からその裾にかけて出土したものである。遺構からの出土は、ある程度まとまってみられるものもあるが、壺甕類の体部破片が多く、実測可能な資料は出土量からすると少ない。今回は、写真による主要器種の紹介のみとなったが、器種は壺(図版６－１～３、３は肩部に断面四角形の凸帯をもつもの)、小型壺(図版８－25～29)、外面赤彩の台付壺(同24)、甕(図版６－４～８、図版７－９～13、同18～20、18は「東海系」、19は「S」字口縁、20は「布留系」)、台付き杯(図版８－21)、小型鉢(図版７－16・17、16は内面黒色処理)、有孔鉢(図版８－22・23)、高杯(同30～32)、器台(同33～39、34は装飾器台)、蓋(同40～44)、手づくね土器などバラエティーに富んでいる。

No.150遺構(第４図ブロック４、第10図、図版１)

Ｂ８グリッド杭付近にある古墳時代前期の竪穴住居。平面形は隅丸方形で、一辺が２ｍ弱の小型のものである。柱穴や炉跡などは検出されていない。壁際にピットがいくつかみられるが、ほとんどが奈良・平安時代のものである。覆土は上部が黒褐色砂を主体としており、下部にむかって暗褐色になっていく。遺物は床面付近から破片のまとまった個体資料が数個体出土している。また、平面プラン確認前の掘り下げの段階で、遺構範囲に重なるような遺物の集中がみられ、プラン確認ができなかった遺構上部の覆土内遺物と思われる。これらを合わせた量はテンバコ約半箱である。北側斜面の勾配のゆるやかなところに存在している住居である。

No. 164遺構(第4図ブロック1、第7図、図版2)

D5・6グリッドで検出された古墳時代前期の竪穴住居。昭和61年の範囲確認調査でトレンチにかかり存在がわかっていたものである。平面形はやや歪んで掘り上がってしまったが、一辺が5mの隅丸方形で、柱穴が2つ検出された。覆土は黒褐色砂と暗褐色砂が交互に入り込むような堆積状況であった。遺物はテンバコ約1箱半の量で、甕類の体部破片が多い。今回検出された4軒の竪穴住居のうち3軒は、標高－3.2m付近の北側緩斜面に存在するが、本遺構だけが標高－2.2mの頂部付近にあり、立地を異にする。

No. 439遺構(第4図ブロック3、第9図、図版2)

B7・C7グリッドで検出された古墳時代前期の竪穴住居。平面形は一辺が5mの隅丸方形で、そのかたちと一致して4つの柱穴が配置している。中央やや北寄りには炉跡と思われる焼土の集中がある。また、南西コーナー付近を除く壁際に周溝がみられる。覆土は上部が黒褐色砂、下部が暗褐色砂となっている。本遺構でも平面プラン確認前に遺物集中がみられ、床面付近のものと合わせるとテンバコ約2/3箱ある。等高線－3.0mラインが頂部にむかって入り込んでいる比較的平坦なところに存在する。

No. 550遺構(第4図ブロック4、第10図、図版2)

A7・B7グリッドで検出された古墳時代前期の竪穴住居。平面形は一辺が5mの隅丸方形で、壁直下を一周する周溝をもつ。床面にピットがいくつかあるが、本遺構にともなう柱穴はそのうちの2つと思われる。No. 440遺構に上部を切られているが、覆土は黒褐色砂1層であるためNo. 440遺構覆土との区別がつきにくく、その重複範囲を明確におさえることができなかった。遺物の出土量はテンバコ約1箱である。

No. 342遺構(第4図ブロック7、第13図、図版1)

D7・E6・7グリッドで検出された円形周溝墓(古墳時代前期)と思われるもの。上部が削平されており遺存状況がよくない。確認面で幅1m前後、深さ15～25mの周溝がわずかに残る程度である。主体部が検出されておらず、円形周溝墓とするには多少無理があるかもしれないが、調査区の中でも比較的高いところに立地することや隣接地の古墳(緒立A遺跡)の存在を考えて推定した。周溝の覆土は酸化鉄付着が顕著なところは褐色砂であるが、基本的には暗褐色である。古墳時代前期の土器が少量出土している。

2．奈良～平安時代

検出された遺構は、掘立柱建物5、井戸1、土坑、杭列などである。これらは、古墳時代の遺構の分布範囲よりも若干標高が高い範囲で存在する。遺構は西方に続いており、中心もこのあたりと思われる。なおSB1～4は現地で判明したものであるが、SB5は図面上で復元したものである。

奈良・平安時代の遺物は、テンバコで約90箱の出土をみる。須恵器・土師器が中心であるが、他に木製品・石製品・金属製品なども出土している。そのなかで、木簡(図版10)をはじめとして、サイコロ(第6図、図版9)、人面墨書土器(図版10)、銙帯(図版9)、『和銅開珎』(図版9)などは、政治色を感じさせるものであり、注目される。ここでは、以下の主要遺構の説明のなかで、比較的遺物量のある資料について、その報告を行う。

SB1(第4図ブロック5、第11図、図版4)

C7・8グリッドにある奈良～平安時代の掘立柱建物である。長軸がN－68°－Eで、桁行3間(8.4)×梁行2間(5.4m)の総柱となっている。柱掘形は径80～100cm、深さ50～100cmの不整円形である。柱穴のいくつかには、その底に柱の据え跡(柱の先端を埋める際に掘った)と思われる穴がみられる。現在、わかっている5棟の掘立柱建物のうち一番規模の小さいものである。SB3・4に切られており、この二者より古いことがわかる。

SB2(第4図ブロック6、第12図、図版4)

C8・D8グリッドを主体に存在する奈良～平安時代の掘立柱建物である。長軸の方向はN－77°－E。桁行4間(13.3)×梁行2間(6.4m)の総柱建物としたが、西側が調査区域外にかかっており、桁行が延びる可能性もある。柱掘形は径100cm前後、深さ80cm前後の大きなもので、平面形は方形に近い円形や楕円形である。柱間はSB4とならぶ規模の大きいものである。SB3に切られることからSB3・4より古いことがわかるが、SB1との新旧関係は不明である。

SB3(第4図ブロック5、第11図、図版4)

C7・8グリッドにある奈良～平安時代の掘立柱建物である。長軸がN－70°－Eで、桁行5間(14.1)×梁行2間(6.3m)の総柱となっている。柱掘形は径80～100cm、深さ70～100cmで、やはり掘形の底に柱分の穴がみられるものがある。平面形は隅丸方形に近い円形のようにも思われるが、柱抜取り作業の際の破壊なのか、整形になるものが少ない。SB1・2を切っているが、SB5に切られている。

SB4(第4図ブロック2、第8図、図版4)

B5・6グリッドにある奈良～平安時代の掘立柱建物。長軸がN－81°－Eで、桁行3間(10.7)×梁行2間(6.5m)の柱間の大きい総柱建物である。柱掘形の平面形は円形か楕円が多く、径100cm前後、深さ70～100cmを測る。この1棟だけが他の掘立柱建物と離れて、標高の高いところに位置し、その差は4～6mである。切りあいによる時期推定はできないが長軸の方位・建物の規模やつくりなどから、SB2とほぼ同時期と思われる。

B5(第4図ブロック5、第10図、図版4)

C7・8グリッドにある奈良～平安時代の掘立柱建物である。長軸の方位はN－58°－E桁行4間(10.5)×梁行2間(6.1m)の総柱としたものだが、1ケ所柱穴の検出されていないところがある。柱掘形は深さ90cm前後で一定しているものの、径は60～100cmと幅がある。SB1・3を

切っており、５棟のなかで一番新しい時期に位置づけられる。

No. 440遺構（第４図ブロック４、第10・14・15図）

包含層（黒褐色砂）中に掘り込まれた平安時代の遺構。覆土が包含層に似ているためその区別が難しく、平面プランが確認できないうちに遺物の集中が現われた。急きょセクションベルトを設定したが、底面付近のプランがわずかに確認できただけである。図化した遺構プランは遺物の分布範囲からひいたものである。竪穴住居の可能性もあるが、カマドらしきものは確認できなかった。

遺物はテンバコ約３箱出土している。須恵器と土師器の割合は約２：１であるが、これは須恵器の大型があるためで、個体数は須恵器がやや多いくらいの量である。須恵器は佐渡・小泊産の古手のものが多く、ついで「新津丘陵」産といわれるものが目立つ。阿賀北産は１点だけである。土師器はカキ目が顕著なものである。長甕は体部上半にカキ目、下半には外面タタキ目・内面あて具痕がみられ、中には体部中位にタテ方向のケズリが施されるものもある。

第14図１～11は須恵器の無台杯。12は皿。13～15は有台杯。底部はすべて回転ヘラ切り。焼成は良好なものが多いが、２・15のようにアマイものもある。２は赤彩の痕跡がみられるものであり、15は底部内面を利用した転用硯である。11は底部に「×」の刻書がある。16～19は須恵器の杯蓋。19は天井部から体部にかけたところに、朱の墨書がある。20は瓶類の口縁部。第15図37～39は須恵器の甕類である。第14図21～25、第15図26～29は土師器の長甕。このうち21は「佐渡型」といわれるもの。第15図30～35は小甕、36は鍋である。

須恵器にやや時期幅があるが、９世紀第２四半紀を中心とした時期と考えられる。

土器溜り１（第４図ブロック３、第９・16・17図、図版５）

Ｃ６グリッドに存在する平安時代の土器集中部。表土剝ぎの段階で、上部の一部がバックフォーのつめにひっかかり、その存在がわかったものである。掘り込みは確認されず、平坦部に土器がまとまっている。土器の出土状況は、原位置での破損ではなく、廃棄されたと思われるものである。SB４との時期比定はしていないが、建物の範囲を外したかたちでSB４に隣接することは、両者のあいだで関連性があるかもしれない。

遺物の出土量は、テンバコ約10箱。土師器は１箱であとは須恵器である。さらにその2/3を大型の須恵器が占める。須恵器は佐渡・小泊産がかなり多くみられる。

第16図40～50は須恵器の無台杯、51～54は有台杯。底部はすべて回転ヘラ切りである。55は「新津丘陵」産かと思われる短頸壺の蓋である。56～61は杯蓋。第16図62・63と第17図64は須恵器甕・壺類。63は新潟ではみられない器形と胎土（断面観察では、黄灰色に近い灰色で、ねっとり感のある緻密な胎土）である。64は本遺跡で一番大きい須恵器甕であり、口縁部に２本の凸帯が巡り、頸部に波状文が施されている。第17図65・66は土師器の長甕。66は「佐渡型」の長甕である。

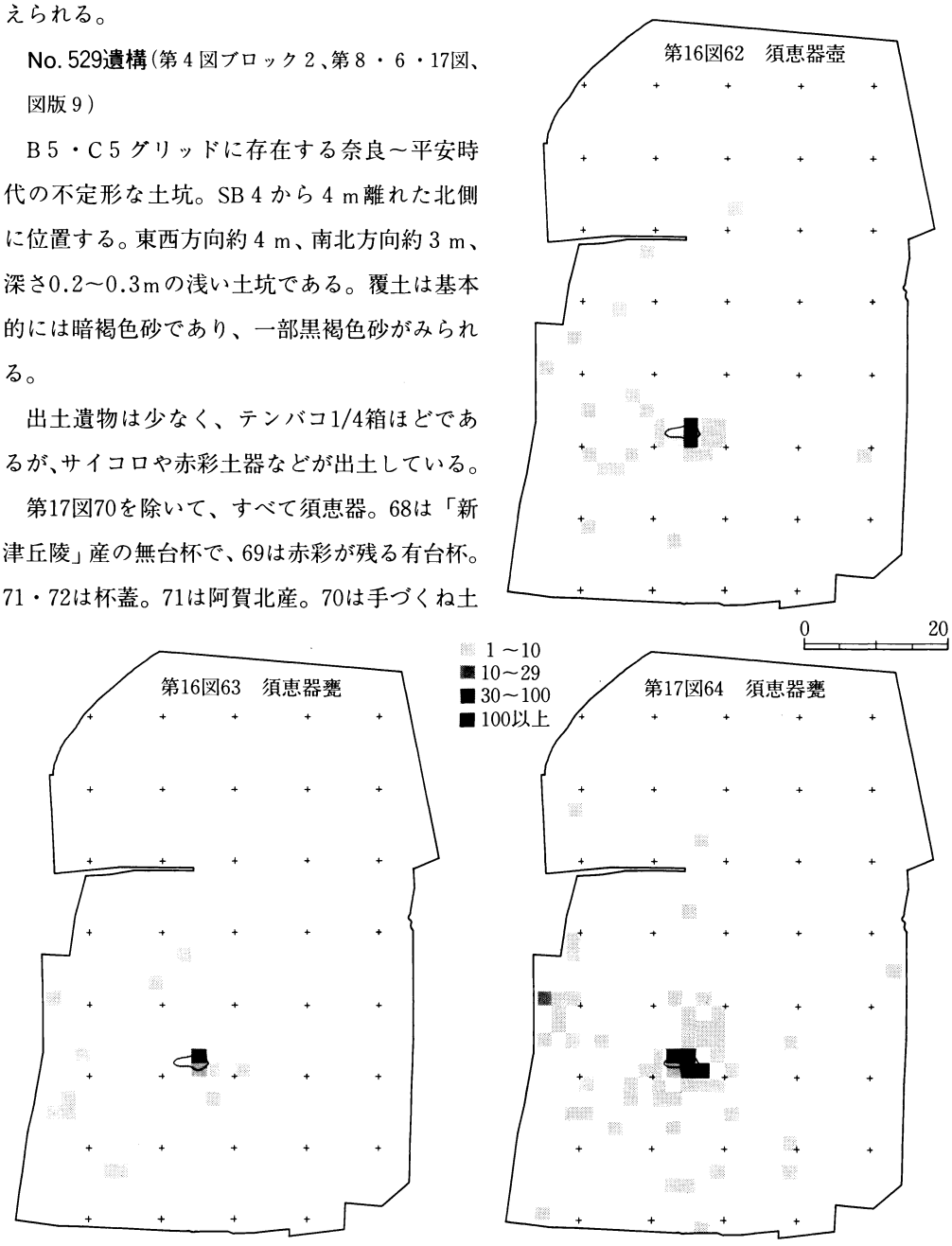
遺物の時期にはかなり幅がみられる。具体的には、9世紀第2～3の佐渡・小泊産の須恵器がまとまりをみせる一方で、40・41・64のような8世紀半ば頃の遺物が共伴しており、要因がなんであるのか、また遺構としての取り扱いをどうするべきか、課題となるところである。第5図は、本遺構の中心時期をはずれた64と、同じ大型須恵器ということで62・63の破片の分布状況を表わしたものである。かなり広がりをもつことがわかり、前述した要因のひとつとも考えられる。

No. 529遺構(第4図ブロック2、第8・6・17図、図版9)

B5・C5グリッドに存在する奈良～平安時代の不定形な土坑。SB4から4m離れた北側に位置する。東西方向約4m、南北方向約3m、深さ0.2～0.3mの浅い土坑である。覆土は基本的には暗褐色砂であり、一部黒褐色砂がみられる。

出土遺物は少なく、テンバコ1/4箱ほどであるが、サイコロや赤彩土器などが出土している。

第17図70を除いて、すべて須恵器。68は「新津丘陵」産の無台杯で、69は赤彩が残る有台杯。71・72は杯蓋。71は阿賀北産。70は手づくね土

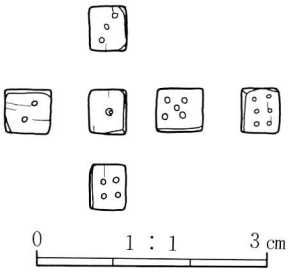


第5図　遺物分布図(1/1,000)

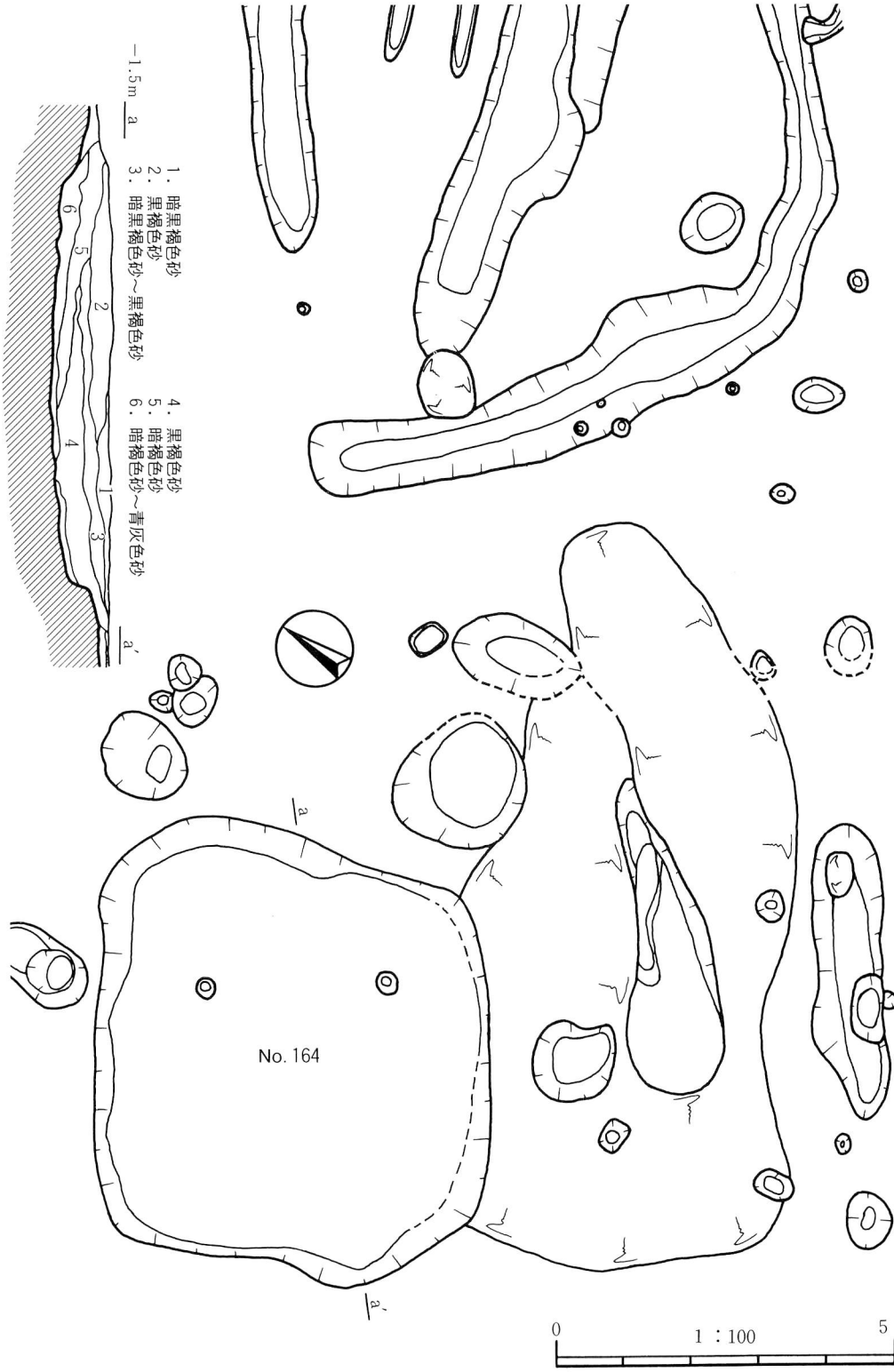
器。第８図のサイコロは角もしくは骨製である。長方形の面もあり、正六面体とはなっていない。

１号木簡(図版10)

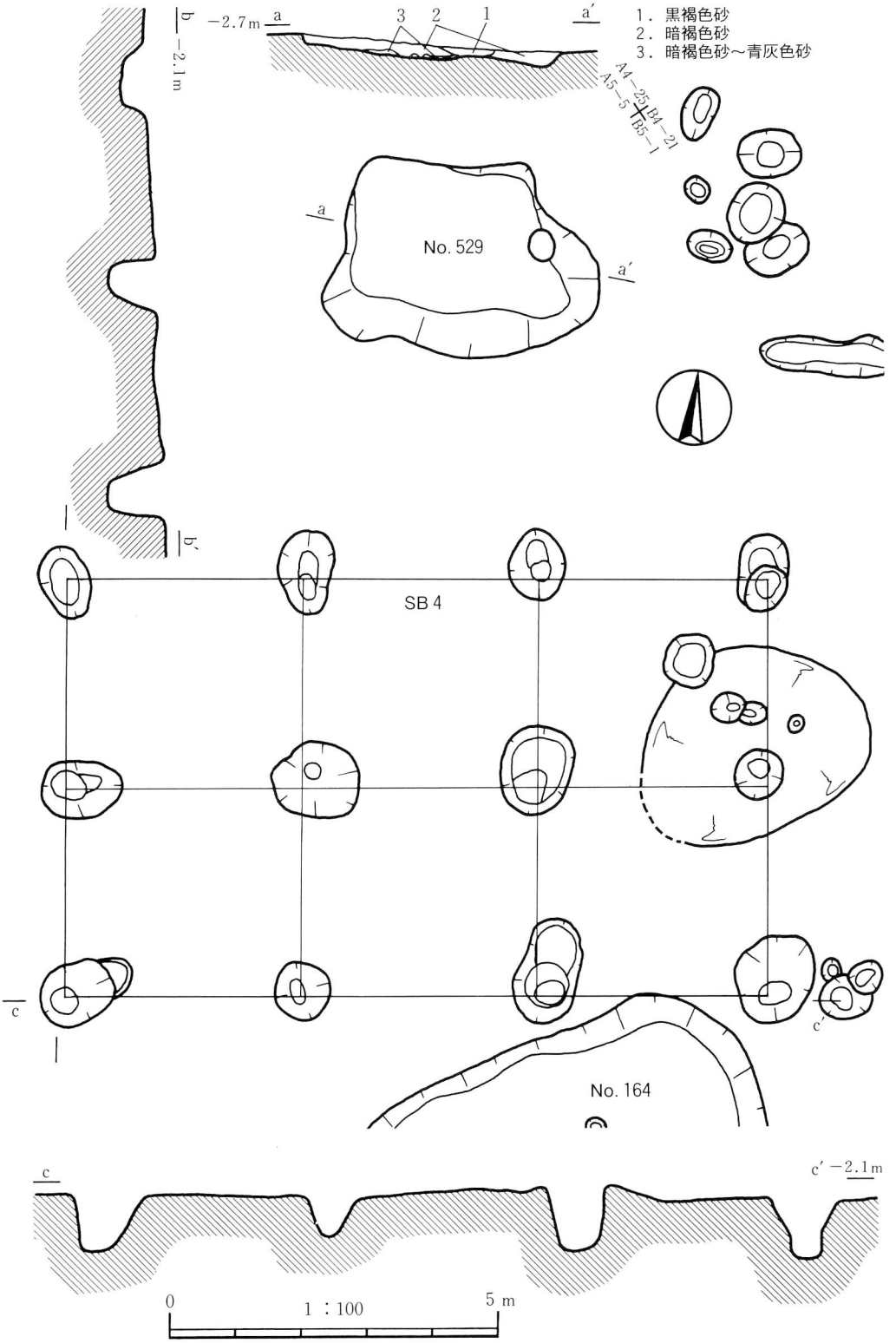
祭祀遺物を含む木製品の集中地点から出土している。両側面は欠損しているが、上下端部は原形を保っており、長さは31.3cmを測る。文字は上部3/4に書かれている。土器名と数量が列記されたもので、物品請求木簡と思われるものである。土器名の「瓹」「瑾」「水戸」は醸造用あるいは水貯蔵用の容器を表わしており、須恵器の大型・中型甕が相当するようである。本遺跡では、No. 440遺構や土器溜り１にみられるような大型須恵器が15個体以上出土しており、木簡の内容との関連性に興味がひかれるところである。081型式。



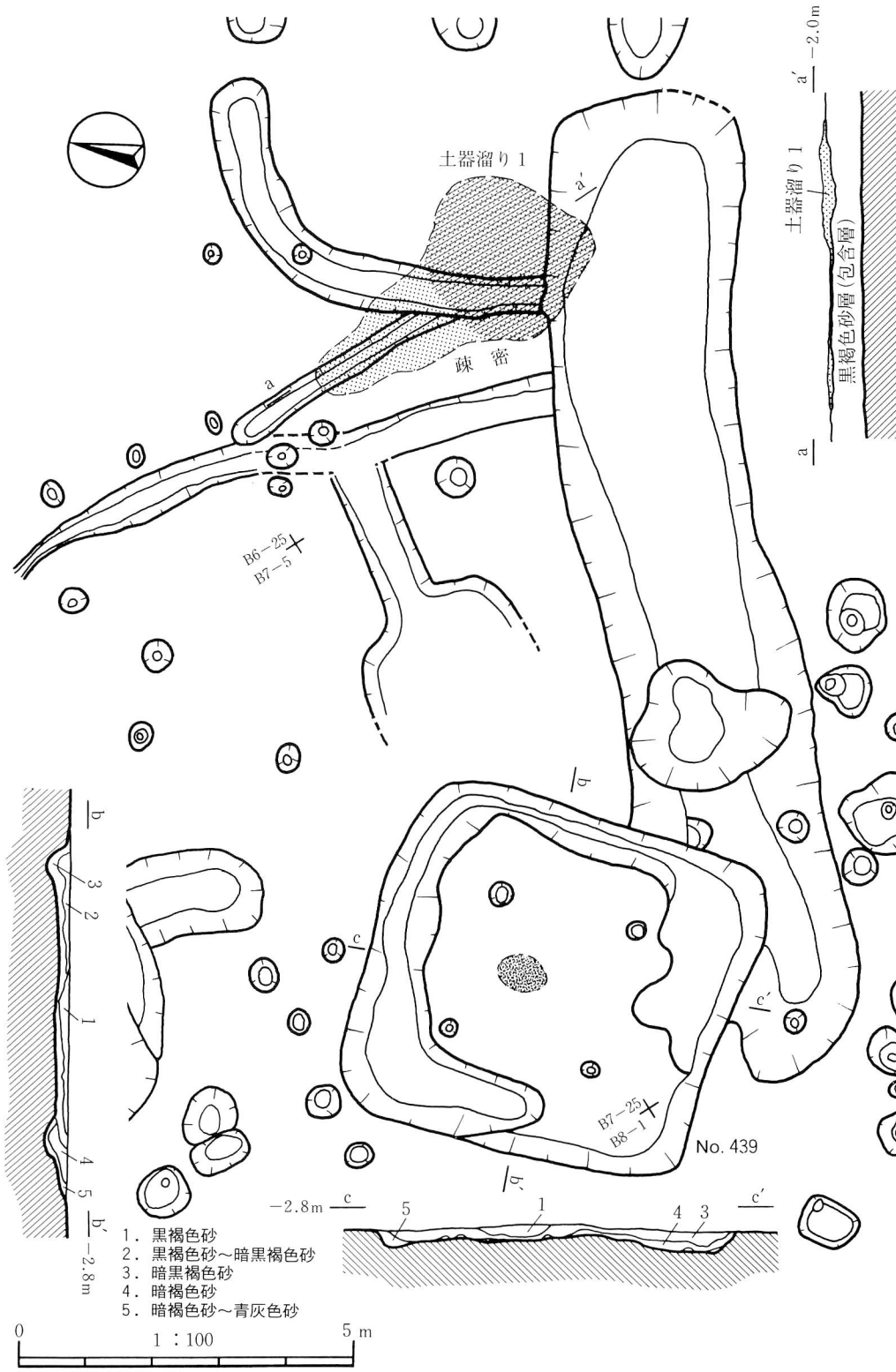
第６図　サイコロ実測図(1/1)



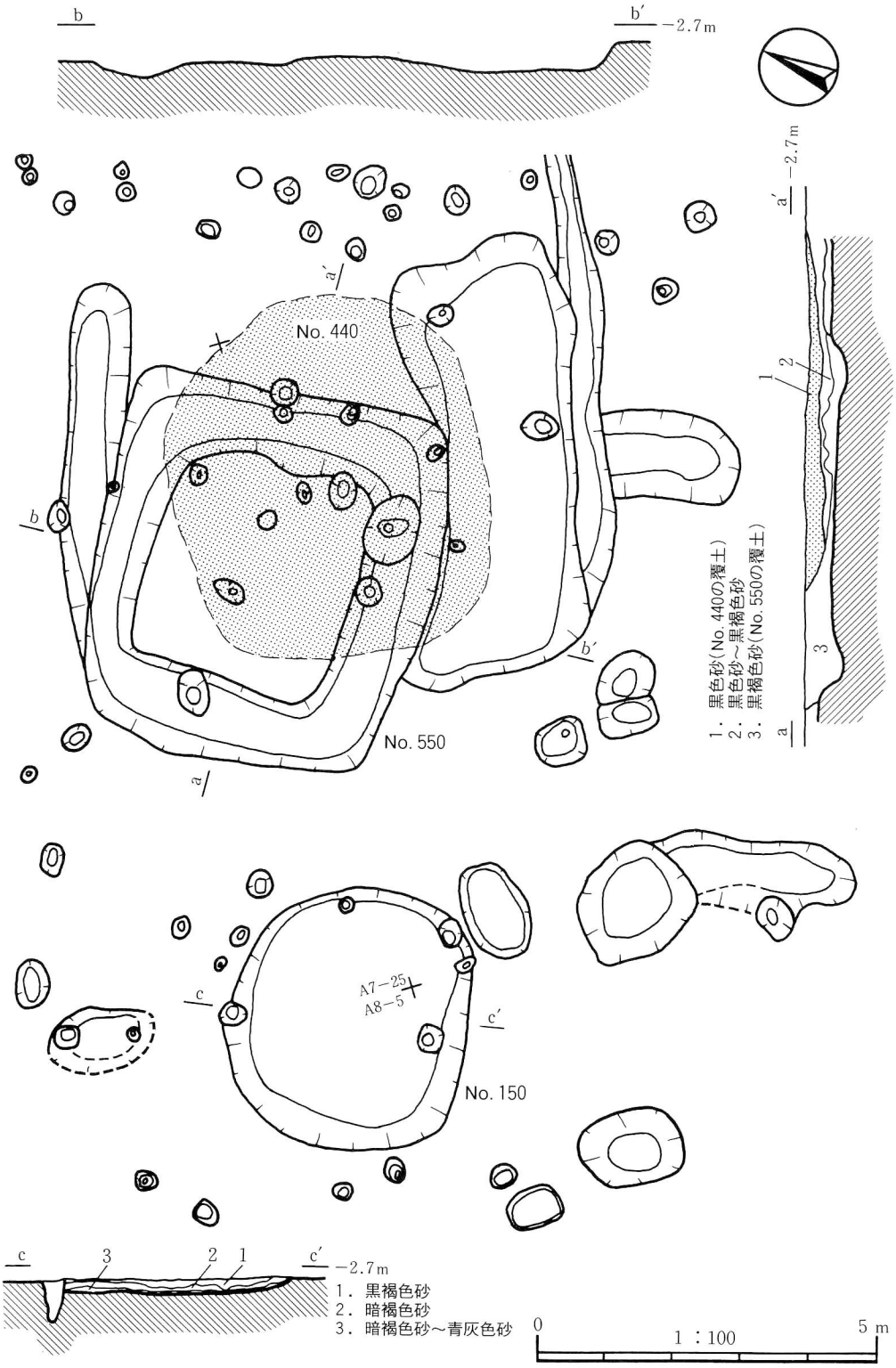
第７図　遺構実測図(第４図ブロック１)



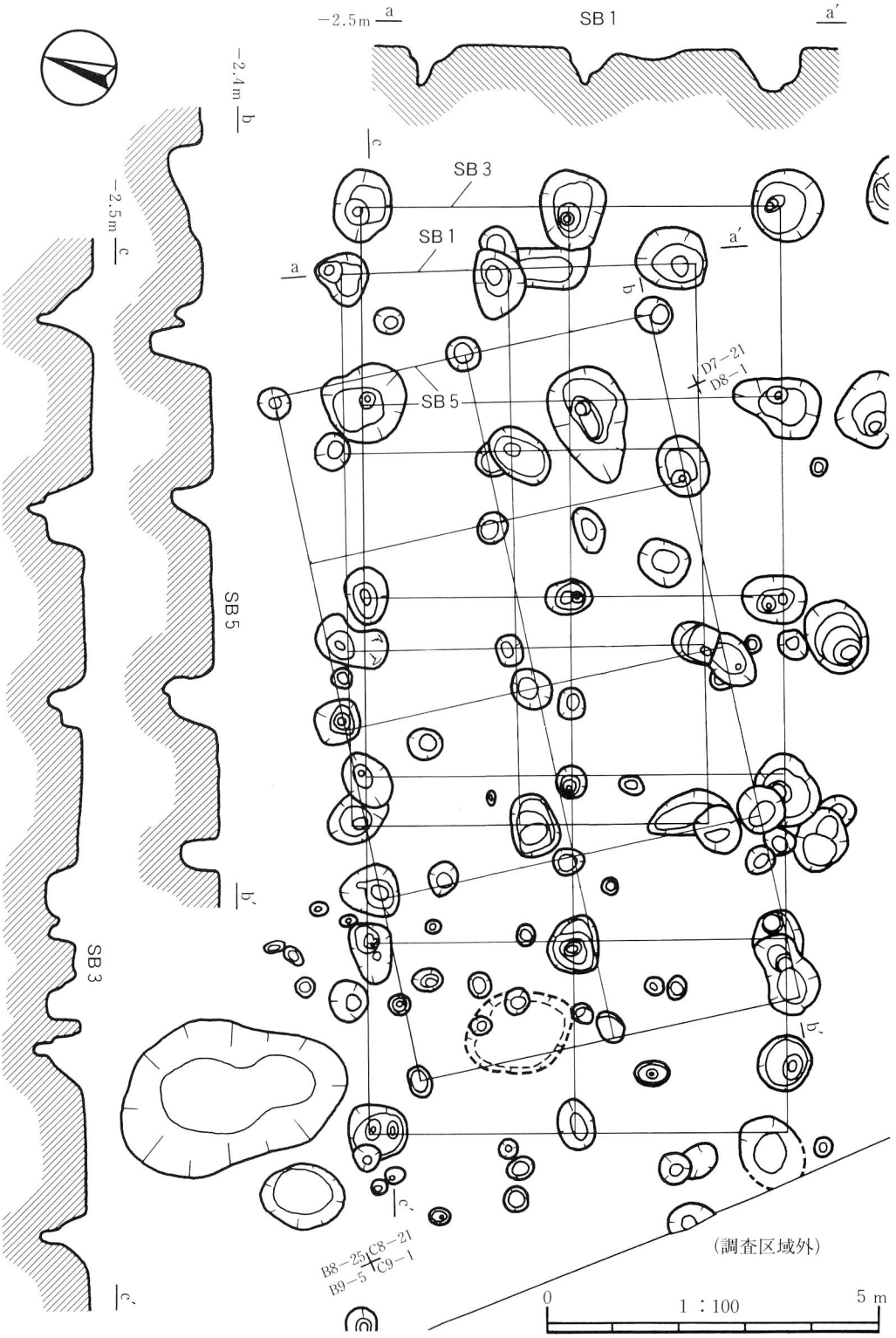
第8図　遺構実測図(第4図ブロック2)



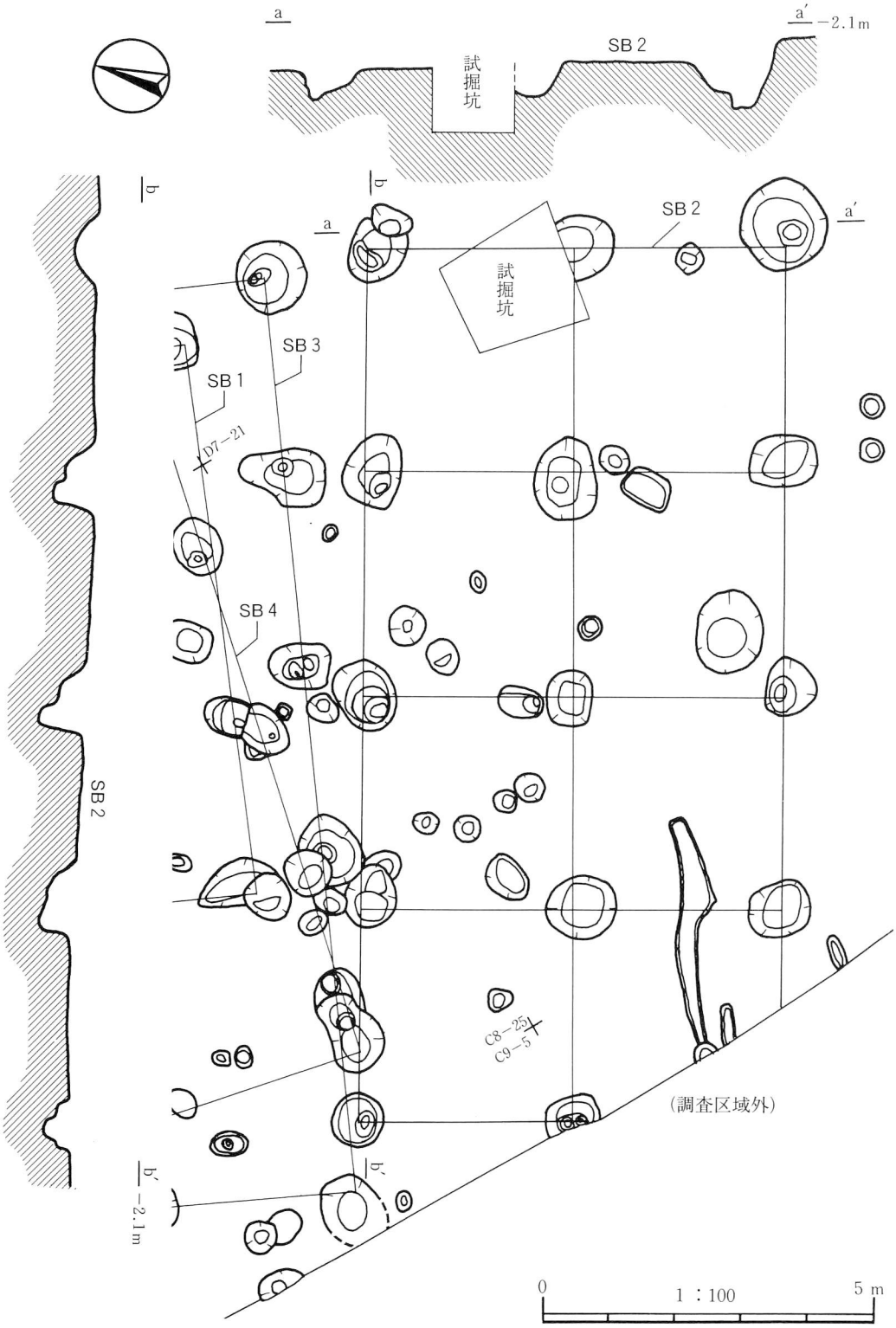
第9図　遺構実測図(第4図ブロック3)



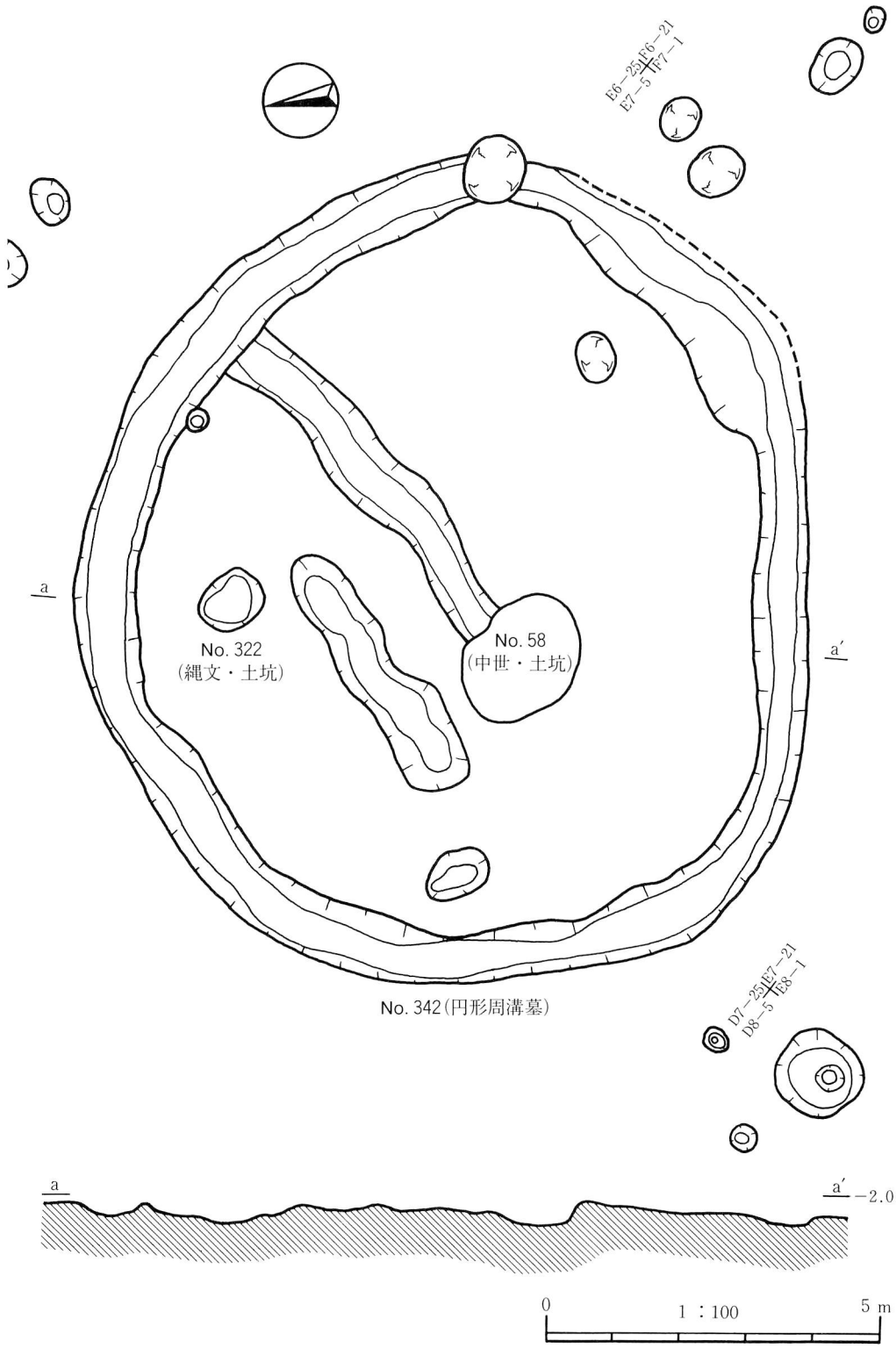
第10図　遺構実測図（第４図ブロック４）



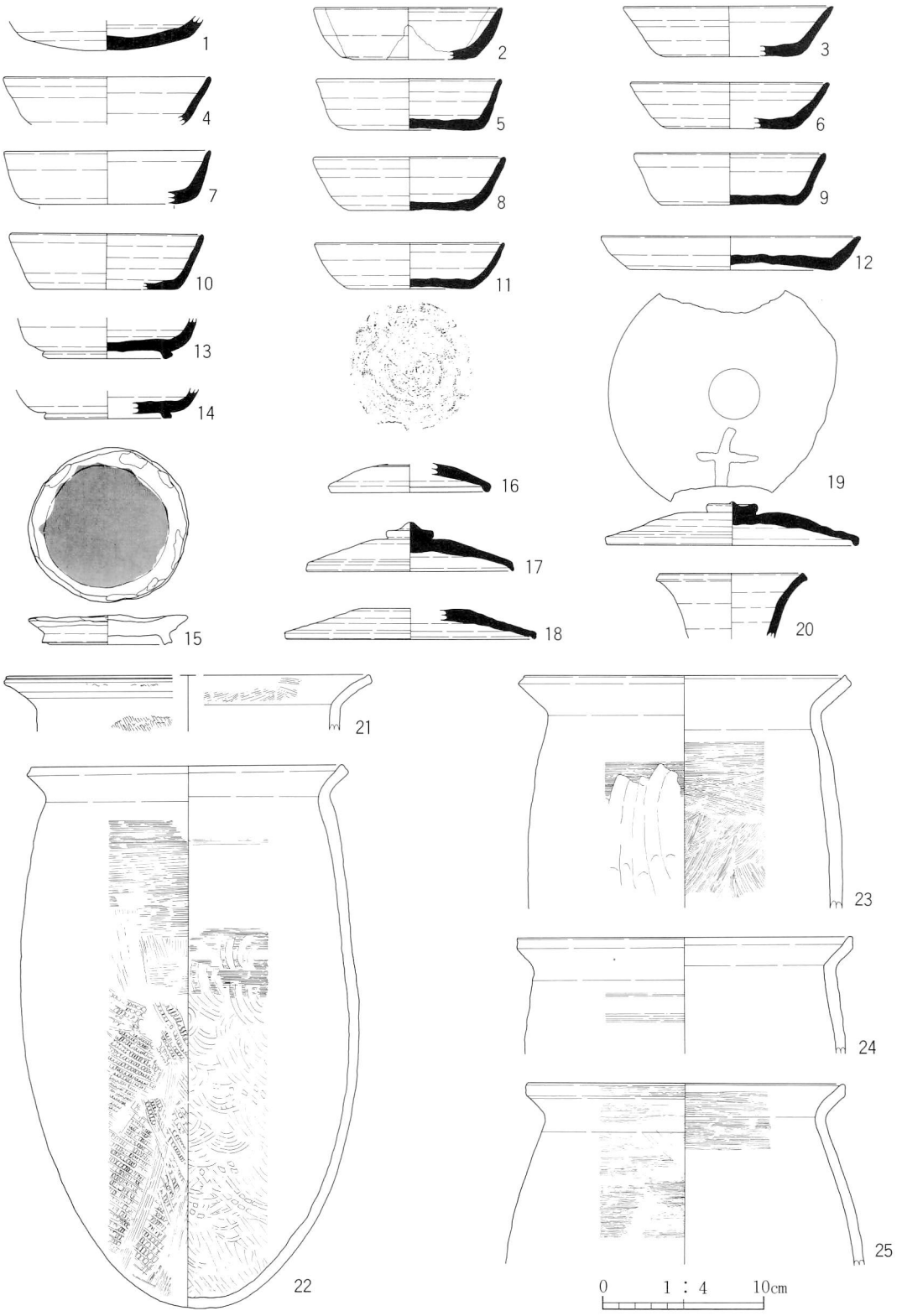
第11図　遺構実測図(第４図ブロック５)



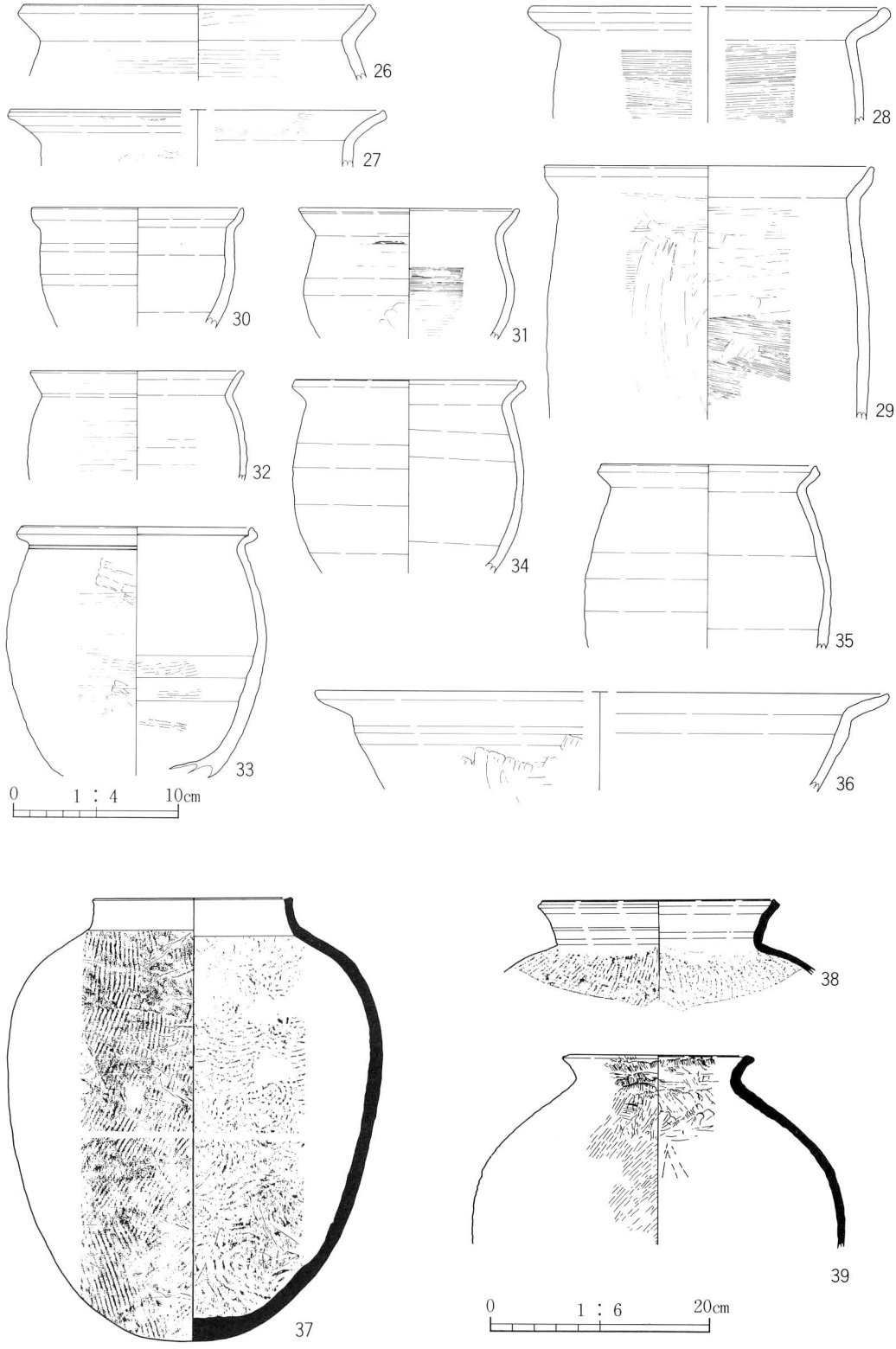
第12図　遺構実測図(第４図ブロック６)



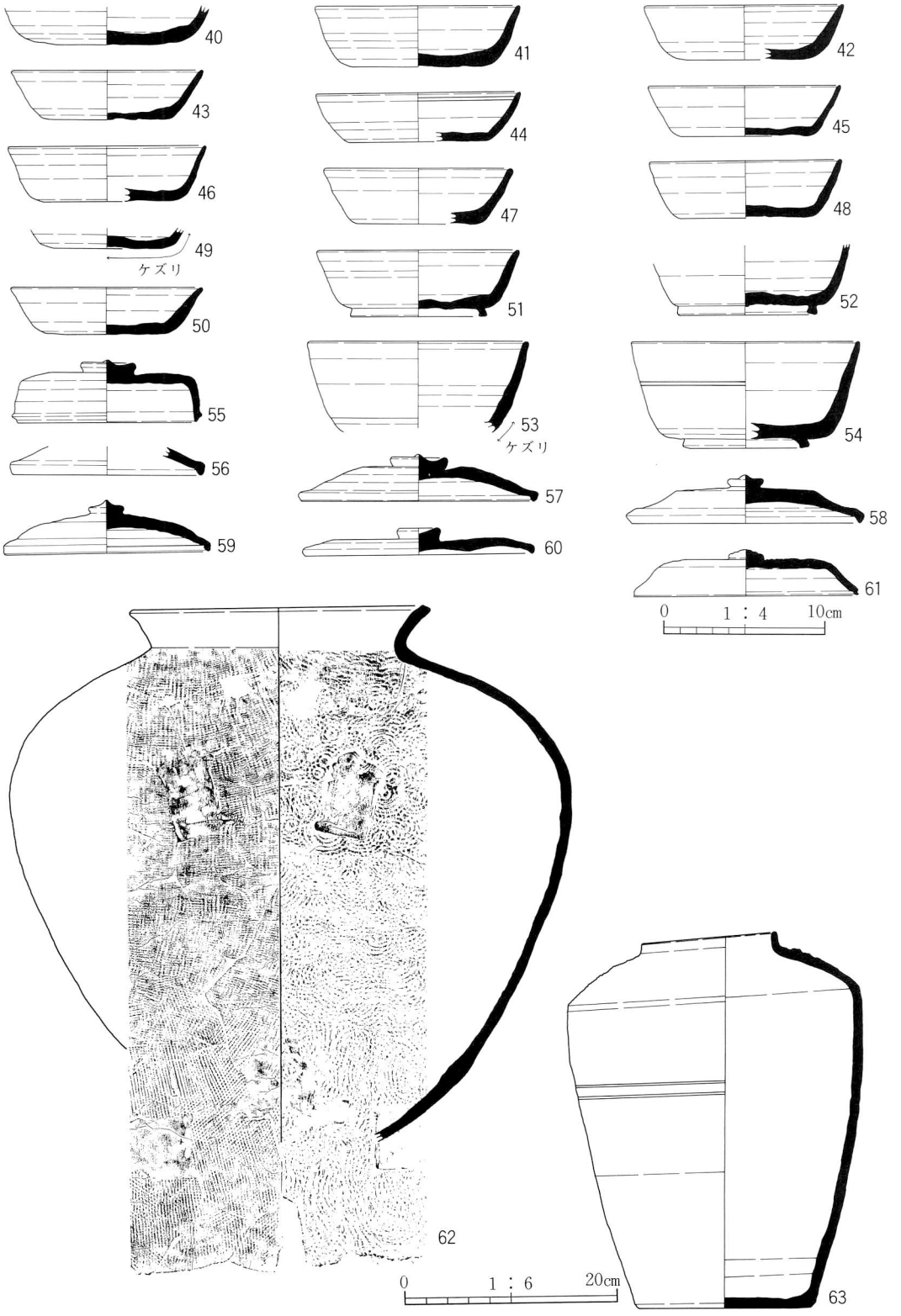
第13図　遺構実測図(第4図ブロック7)



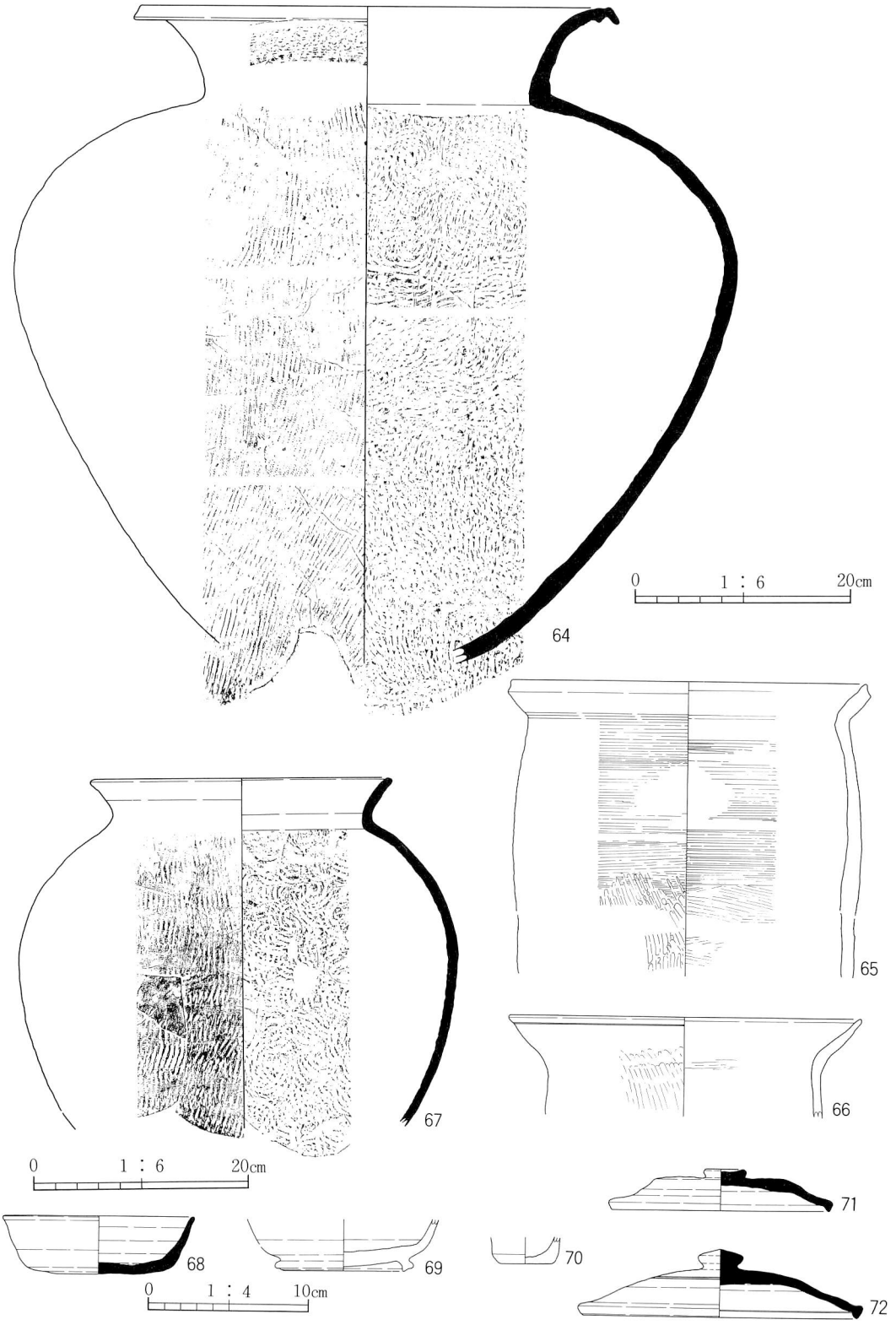
第14図　遺物実測図(No. 440遺構)



第15図　遺物実測図(No. 440遺構)



第16図　遺物実測図(土器溜り１)



第17図　遺物実測図(土器溜り1 64～66・No. 529遺構67～72)

V まとめ

今回の調査では、多くの貴重な情報を得ることができた。それは過去に行われた調査の成果を補足・再認識するばかりでなく、重要課題として新たに認識されるものも多い。ここでは、主要な成果について取り上げ、簡単な説明と課題をのべてまとめとしたい。

縄文時代晩期

出土遺物は土器が大半で、調査区全域から破片が出土している。テンバコで2箱ほどであるが、ほとんどが粗製の深い鉢である。今回の調査では土坑が2基検出されており、ひとつは95×80mの楕円形で、胴部上半を欠損した2個の深鉢とやはり半分を欠損した石皿が床直上に置かれたような状況で出土しているものであった。墓坑を思わせるが、いずれにしろ生活の場(本拠地)を示唆するものである。

古墳時代前期

今回の調査では、竪穴住居、溝状遺構、円形周溝墓など明確な遺構の他に、土器捨て場的な遺物の集中が検出された。これらの配置から集落の構造についてあるていど言及できると思われるが、未調査地もあり、ここでは想定にとどまる。遺構は、「細長い砂丘地形に規制された」というより「地形に応じた」配置となっている。円形周溝墓が頂部付近のやや南寄りに位置し、竪穴住居が北側の緩斜面に存在する。これらの南西(奈良～平安の掘立柱建物群があるあたり)は遺構がほとんどなく、広場とも思える空間である。また北側縁辺付近には低地部あるいは水辺を選んだ土器捨て場があり、完形に近い遺物も多いところから、祭祀行為が行われた後の一括廃棄も含まれると考えられる。各遺構の細かい時期比定はしていないが、ある一定の時期にはおさまるようであり、前述のような空間利用が想定できる。

奈良～平安時代

緒立遺跡はこれまで縄文時代晩期～弥生時代、古墳時代前期の遺跡として名が知られていたが、今回の調査でこの時代においても注目される遺跡であることが判明した。具体的には8世紀中頃～9世紀第3四半紀の期間と思われるが、かなりの繁栄をみていたことがうかがえる。遺構では総柱の掘立柱建物や井戸、遺物では『和銅開珎』や銙帯・木簡やその内容と関連があるかもしれない須恵器の大型容器類・人面墨書土器や木製の祭祀遺物などが特記される。総柱の掘立柱建物は倉庫と考えられるものであるが、これに対応する竪穴住居は未確認のNo.440を別にして本遺跡からは検出されていない。また人面墨書土器や斎串などの祭祀遺物が標高の低い斜面裾付近に分布していることより、本地点において水辺の祭祀が行われた可能性もあり掘立柱建物の問題と合わせて、集落構造や性格を考えるうえで重要である。現在のところ遺跡の性格については、立地的に交通の要所となり得る地点であるというところから、そのような

機能をもちあわせた官衙的なものを想定している。

中　　世

この時代も予想外の成果となった。墓と思われる土坑が20数基検出された。長径184cm短径154cmの大きいものもあるが、大半は長径90cm短径80cm前後のもので、それらは頂部付近の標高の高いところに集中している。遺構からは時期のわかる遺物は出土していないが、その覆土が14世紀頃にあたる遺物を出土した中世包含層と同じであるということから、中世の墓坑群とした。壁際には炭や灰などがはりついているものが多い。出土遺物はほとんどが木製品で、箸状、下駄、小皿、折敷、呪符木簡などが出土している。居住域は不明であるが、この西方300mには緒立館跡、北東700mには中世の館跡ともされている的場遺跡があり、関連性が気になるところである。

以上、本遺跡における各時代の様相について、かいつまんで述べた。

A地点、B地点、C地点を含めた緒立遺跡は、存在が確認される各時代において、周辺地域の中心的地点であったと想像できる。特に、古墳時代においては地方権力者の拠点、奈良～平安時代においては一地方(といっては過言であるかもしれないが)における政治色をもった交通・流通の要所と考えられる。今後はその成立要因についても注目する必要がある。

引用・参考文献

小池邦明・藤塚　明・本間桂吉　1994　「2.的場遺跡発掘概要」『1989年度埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟市教育委員会

北村　亮ほか　1983　『緒立遺跡発掘調査報告書』　黒埼町教育委員会

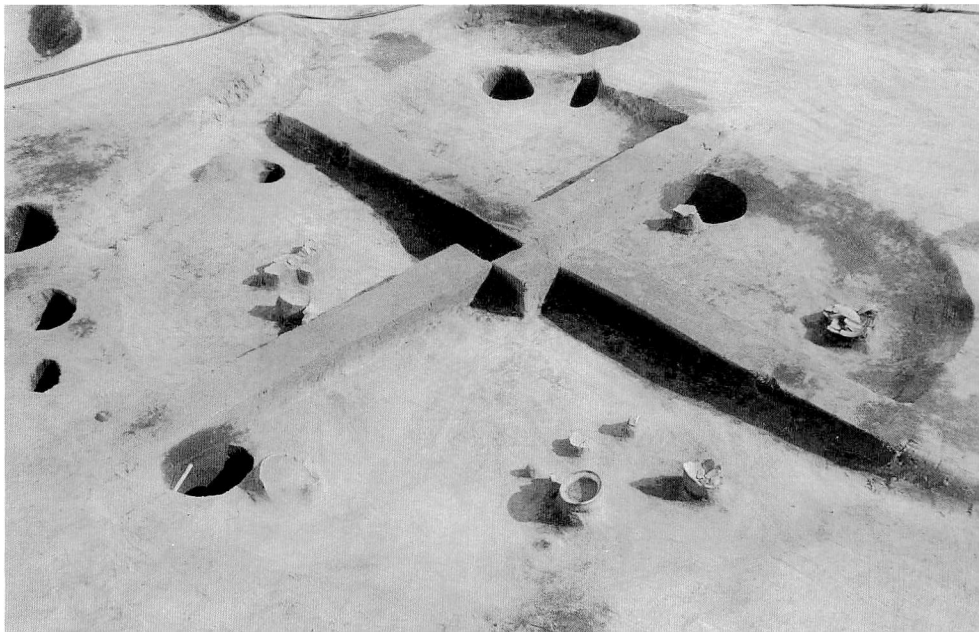
坂井秀弥　1989　『山三賀II遺跡』　新潟県教育委員会

永峯光一ほか　1982　『緒立八幡神社遺跡』　黒埼町教育委員会

図版 1

遺跡近景(北東から)

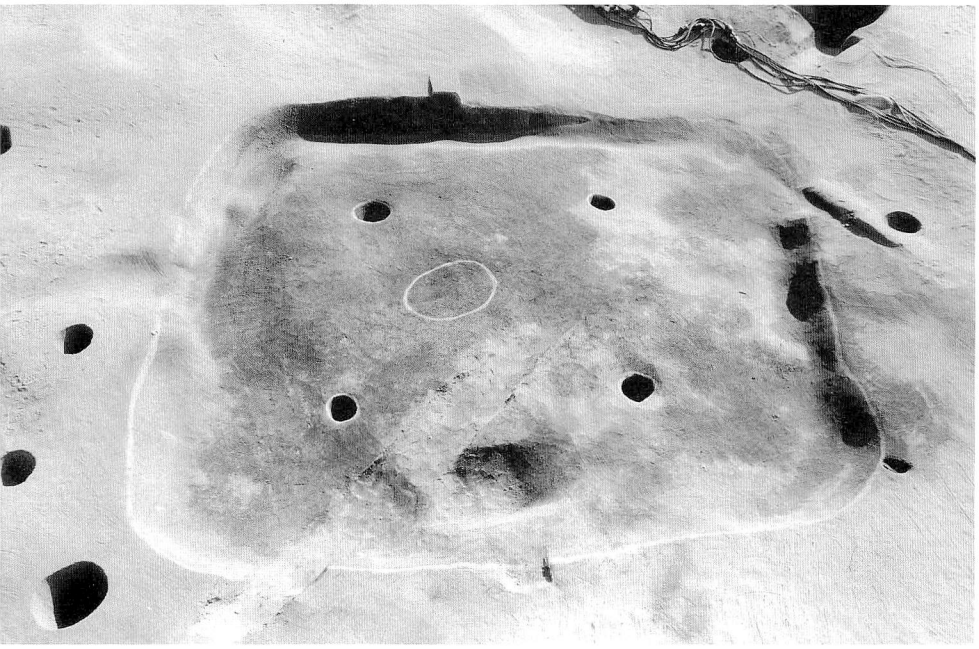
No. 342
(円形周溝墓)



No. 150
(古墳・竪穴住居)

図版 2

No. 164
（古墳・竪穴住居）



No. 439
（古墳・竪穴住居）

No. 550
（古墳・竪穴住居）

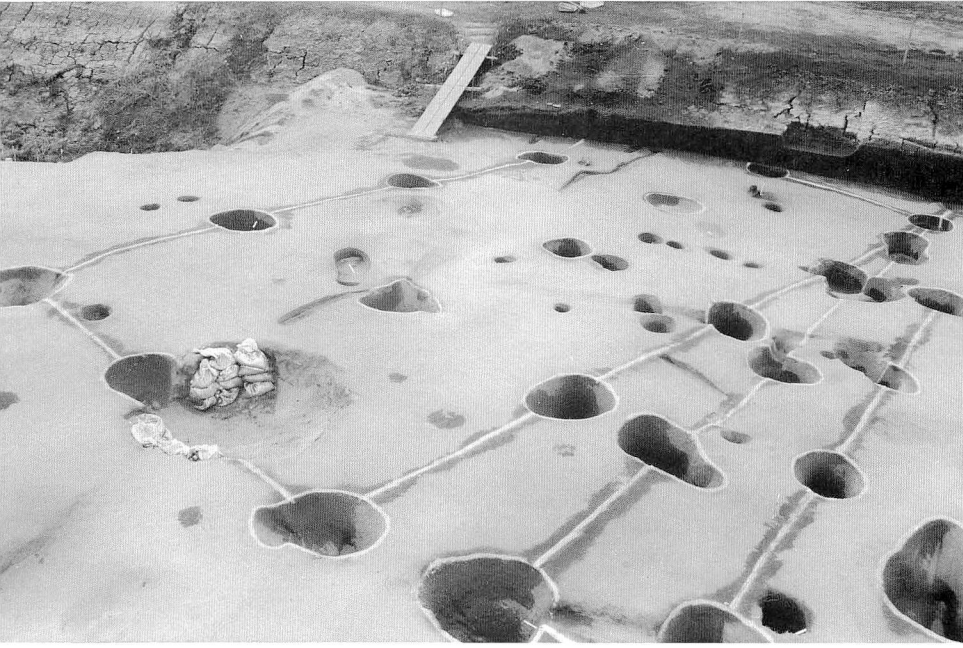
図版 3

No. 526（古墳・溝状遺構）
杭列（奈良～平安）

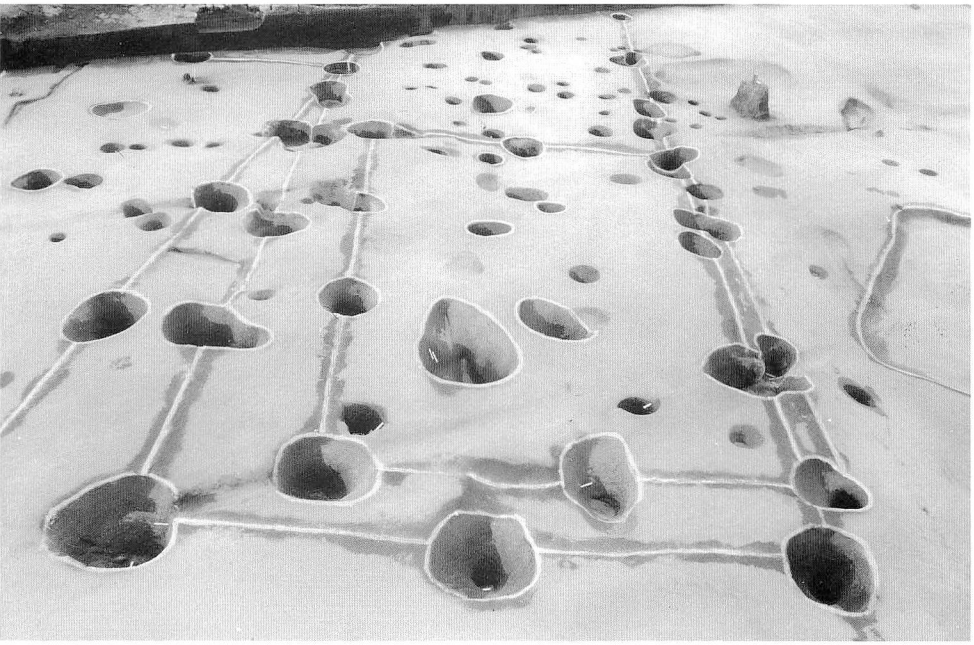
94 A 一括
（古墳・土器集中部）

掘立柱建物群
（東より）

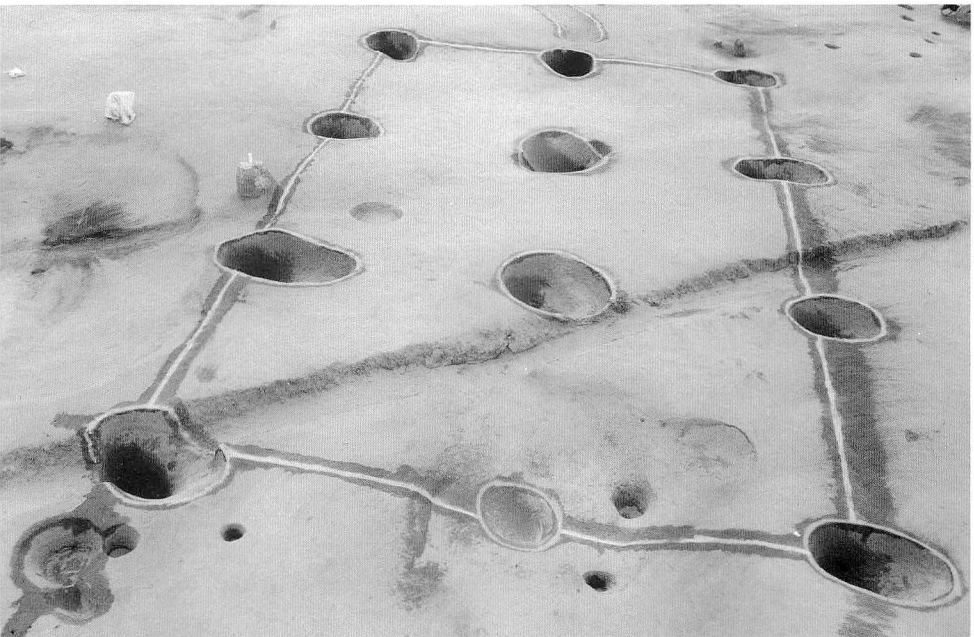
図版 4



SB 2



SB 1 ・ 3 ・ 5



SB 4

図版 5

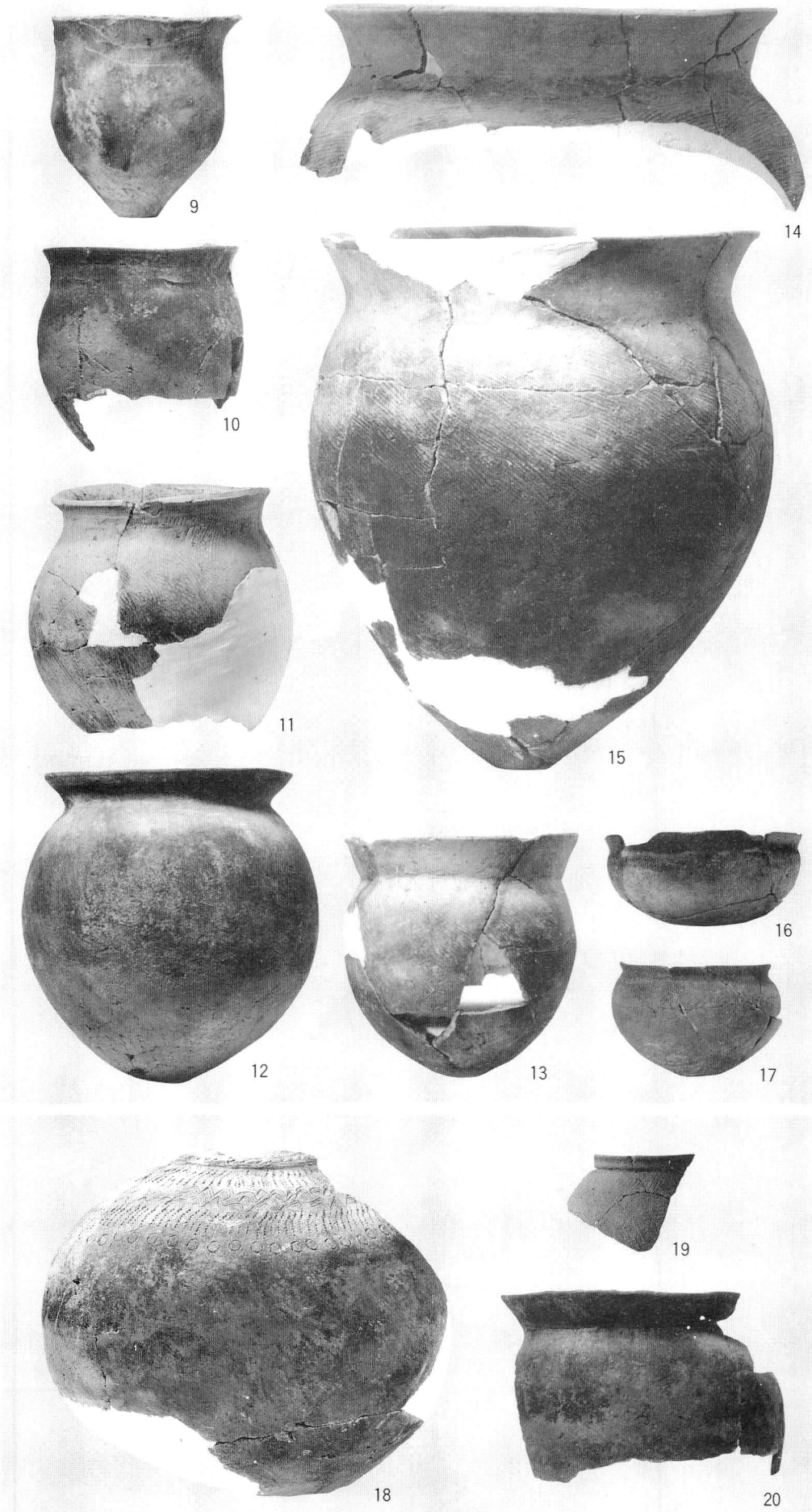
土器溜り 1
(平安時代)

No. 22
(奈良～平安・井戸)

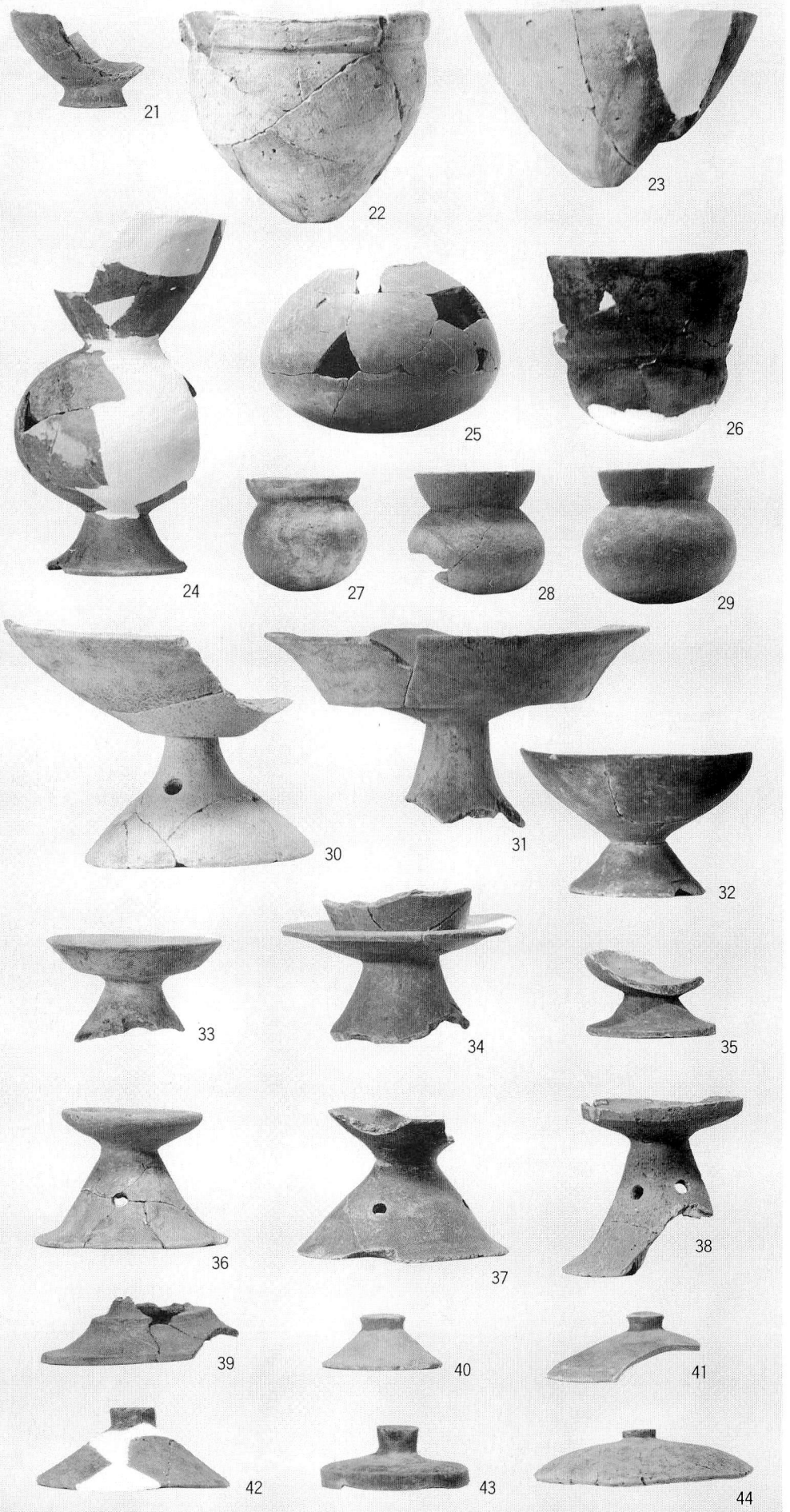
No. 22
(奈良～平安・井戸)

古式土師器 1

図版 7

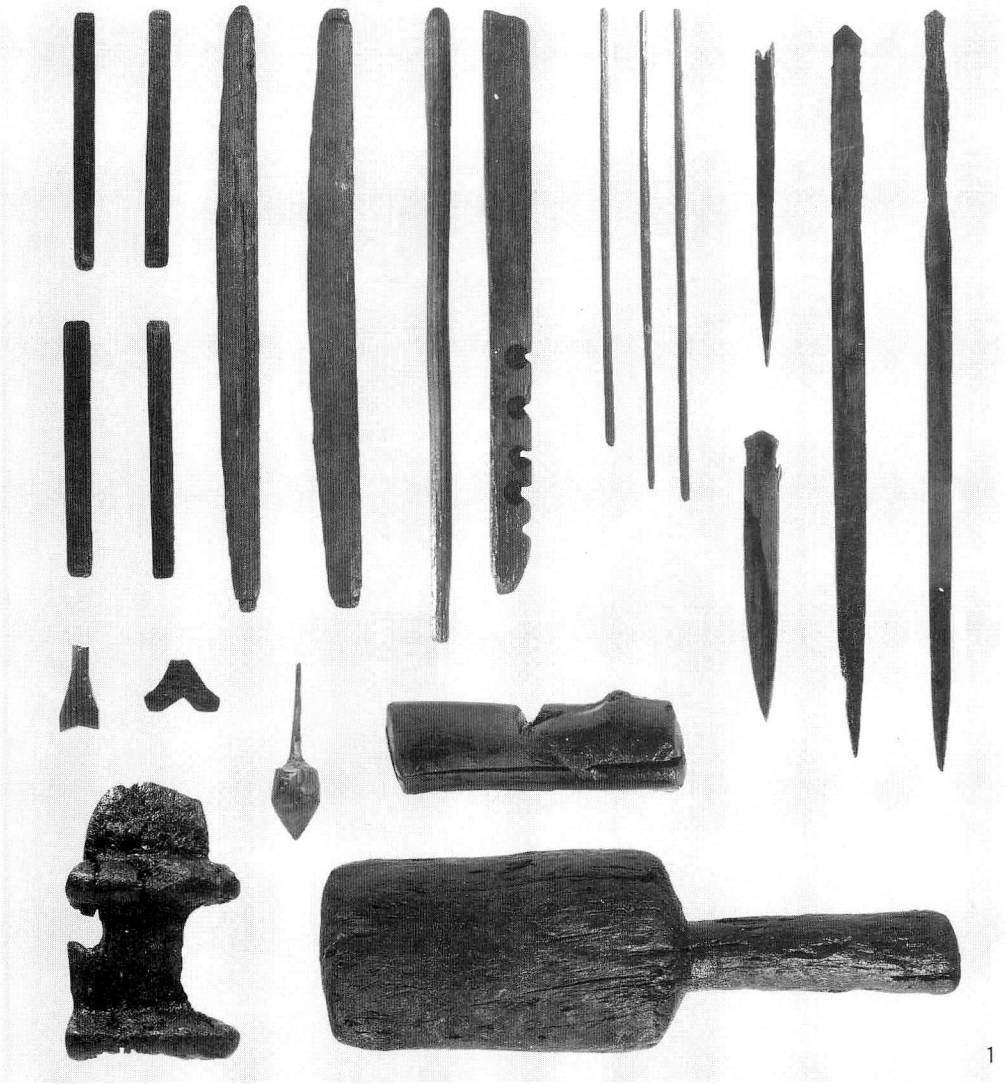


古式土師器 2

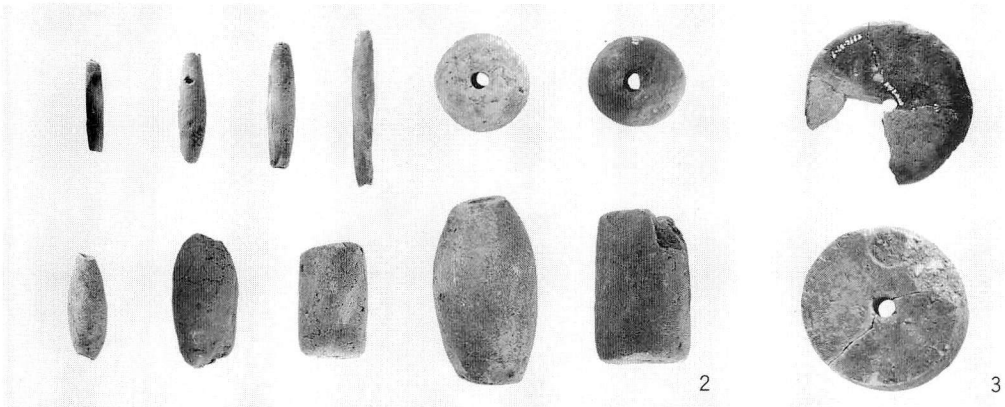

21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

図版 9

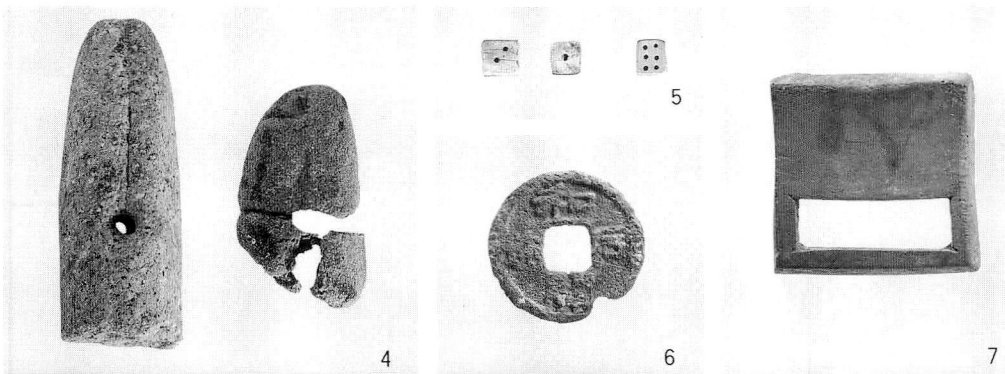
（1～4は1/3
5～7は1/1）



1　木製品
（奈良～平安時代）

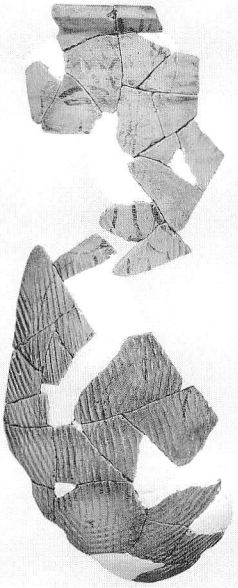


2　左　土錘
3　右　紡錘車
（奈良～平安時代）

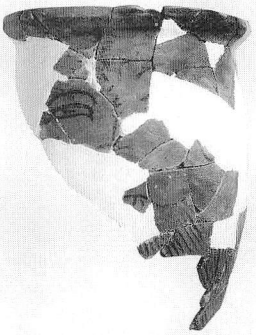


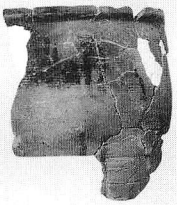
4　左　石錘
5　中央上　サイコロ
6　中央下　『和銅開珎』
7　右　銙帯（帯金具）
（奈良～平安時代）

図版10



人面墨書土器(長甕)





(小甕)

・「瓱一理六水戸四瓱二　□□□□
酒杯九十
□□
」
・「□□□□□□□□□□□」　313×(33)×10　081型式

1号木簡

「(符籙)急々如律令」　168×40×2　011型式

2号木簡

「(符籙)急々如律令」　132×25×2　033型式

3号木簡

（付編）

緒立Ｃ遺跡　公園地（「緒立公園」）
確認調査報告

緒立Ｃ遺跡（公園地）範囲確認調査

１．調　査　地

西蒲原郡黒埼町大字黒鳥字川根潟5471番地２、5473番地１、5474～5478番地

２．調 査 期 間

平成３年５月13～15日

３．調 査 面 積

調査対象面積　約2,400㎡

調査掘削面積　約156㎡（12㎡×13ケ所、掘削が深く危険が伴うため、法面を大きくとっている。）

４．調査に至る経緯

昭和63年度施行開始の緒立区画整理事業は、新潟流通センターに隣接した8.1 ha をその対象範囲として行われた。事業目的は物流拠点機能の一部を担う地域づくりであり、流通業務用

第１図　確認調査地点(1/5,000)

地や宅地の合理的な造成・公共施設の設備改善を主眼に事業内容が計画された。そのなかで区画整理面積の３％にあたる約2,400㎡を公園地として造成することとなったが、約8,000㎡に広がる緒立Ｃ遺跡を一部でも現状保存することと、常民文化史料館との一体的な利用ができるようにするという観点から、本地点の公園地化が決定した。

公園造成の内容については、緒立Ｃ遺跡の発掘後の平成２年末頃より計画づくりが動きだし関係者による協議がもたれたが、具体化するためには当該地点における遺跡範囲の把握が必要であった。翌年１月に緒立区画整理組合(理事長　細山三郎氏)によって提出された文化財保護法第57条の２第１項の規定に基づく届出に対しても、「確認調査が必要」との指示があった。これをうけて黒埼町教育委員会は文化財保護法第98条の２の規定に基づく発掘調査の通知を行い、同年５月13～15日の３日間の確認調査を実施した。

５．調査方法と調査経過

公園予定地内に第２図のような試掘地点を設定した。試掘は0.7㎥のバックホーにより何回にも分けて掘削するという方法をとったが、遺跡はできるだけ完全な状態で現状保存とするため、包含層上面が検出したところで掘削を止めた。出土した遺物は取りあげ試掘坑ごとにまとめた。土層堆積状況は任意に良好な場所を選び、柱状図として記録した。

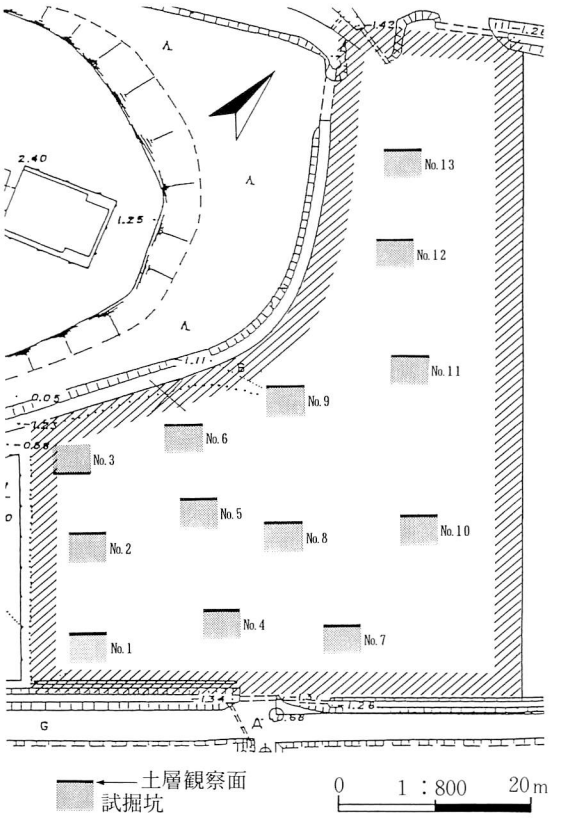
６．調 査 結 果

ａ．層序(第３図)

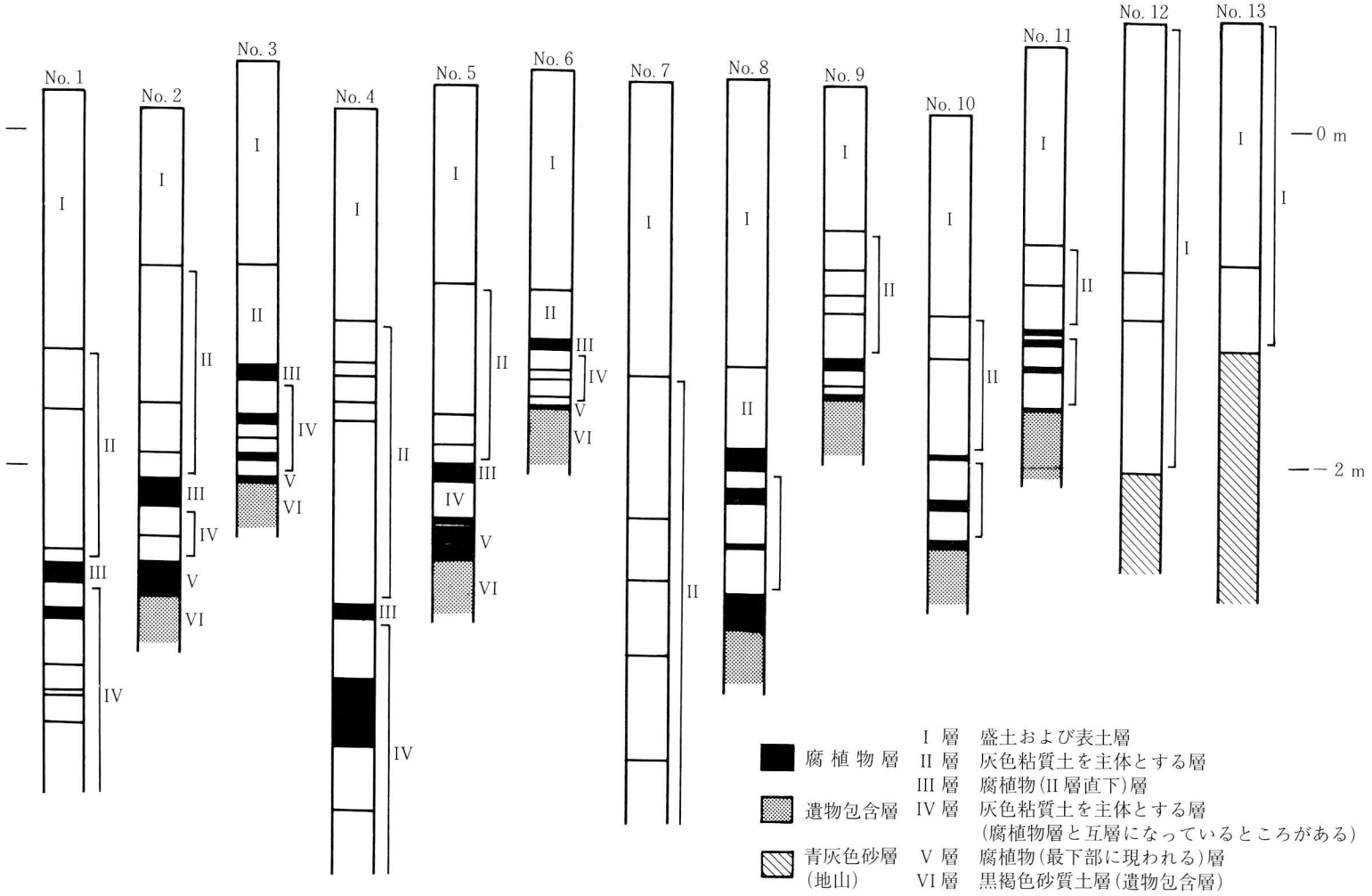
この調査では遺跡の破壊を最小限にするため、遺物包含層が現われたところで掘削を終了している。したがって検出最下層が黒色砂質土(遺物包含層)となる。包含層が現われないところの掘削は、バックホーのアームが達く深さまでとした。基本層序は包含層までⅠ～Ⅳ層がある。内容は第３図のとおりである。

ｂ．出土遺物(表１、第４図)

前述したように、掘削は遺物包含層の上面で止めているため、採取された遺物は少量である。数量は表１のとおりであるが、遺物の時代は、縄文時代、古墳時代前期、



第２図　試掘坑設定図(1/800)

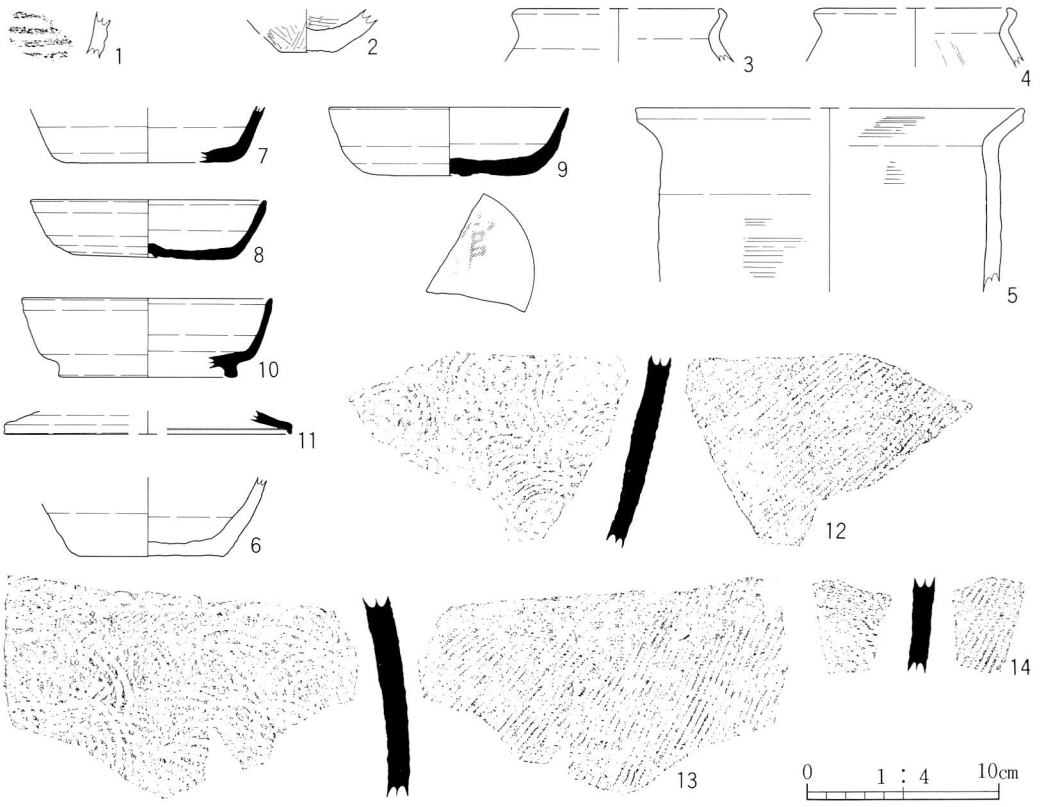


第3図　土層柱状図(1/40)

表1　出土遺物一覧表

	縄文土器	古式土師器	須恵器	土師器	木製品	土錘	礫	計
試掘坑No 1	—	—	—	—	—	—	—	—
試掘坑No 2	1	10	7	8	—	—	5	31
試掘坑No 3	—	47	7	14	1	2	12	83
試掘坑No 4	—	—	—	—	—	—	—	—
試掘坑No 5	—	4	2	1	2	—	5	14
試掘坑No 6	—	1	—	—	—	—	4	5
試掘坑No 7	—	—	—	—	—	—	—	—
試掘坑No 8	—	—	4	4	—	—	2	12
試掘坑No 9	—	1	—	—	—	—	2	3
試掘坑No10	—	—	—	—	1	—	—	1
試掘坑No11	—	4	3	7	—	—	2	16
試掘坑No12	—	—	—	—	—	—	—	—
試掘坑No13	—	—	—	—	—	—	—	—
合　計	1	69	23	34	4	2	32	165

（単位：点）　　※墨書土器（底部外面）1点含む



第4図　遺物実測図(1/4)

奈良・平安時代、中世と多期にわたっている。

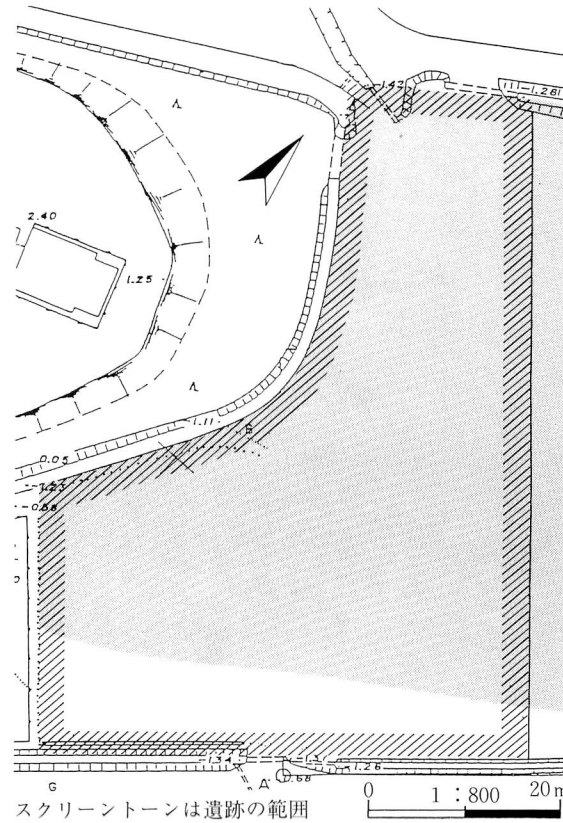
第4図1は縄文土器である。晩期の鉢と思われる。2は古墳時代前期の土器。いわゆる古式土師器は出土量が一番多く、包含層が確認されたほとんどの試掘坑でみられる。多くの甕類の胴部破片で、外面に刷毛目、内面にナデの調整痕がみられるものである。第4図3～6は土師器の長甕、小甕、7～14は須恵器で無台杯、有台杯、杯蓋、横瓶、短頸壺、甕類などが出土している。9は墨書土器(須恵器杯)である。底部外面に「官」と思われる文字(あるいは「館」のつくり)がみられる。図版2の6は試掘坑No.10より出土した木製品であるが場所によってV層直上にみられる1㎝ほどの灰色砂質土(註1)から出土しており、本格調査地点との対比から中世の遺物とした。

6．ま　と　め

以上の結果と平成元・2年の緒立C遺跡発掘調査の結果から、遺跡の範囲は第5図のように推定される。試掘坑No.12・13では包含層が検出されずに地山(青灰色砂)が現われたが、地元の人の話によると、昭和24年ごろそこに堀があったということであり、包含層が除去されていると思われる。本格調査が終了している隣接地との関係から、試掘坑No.12・13周辺の堀をはずれた地点では包含層が存在するものと考えられ、ここではそれを加味した遺跡範囲の線引きを行った。

なお、本地点は本格調査地点と同様に注目されるところであり、今後その認識と開発への対応が重要となってくる。

(註1)　第3図のIV層最下面にみられるものであり、ここではIV層のなかに含んでいる。

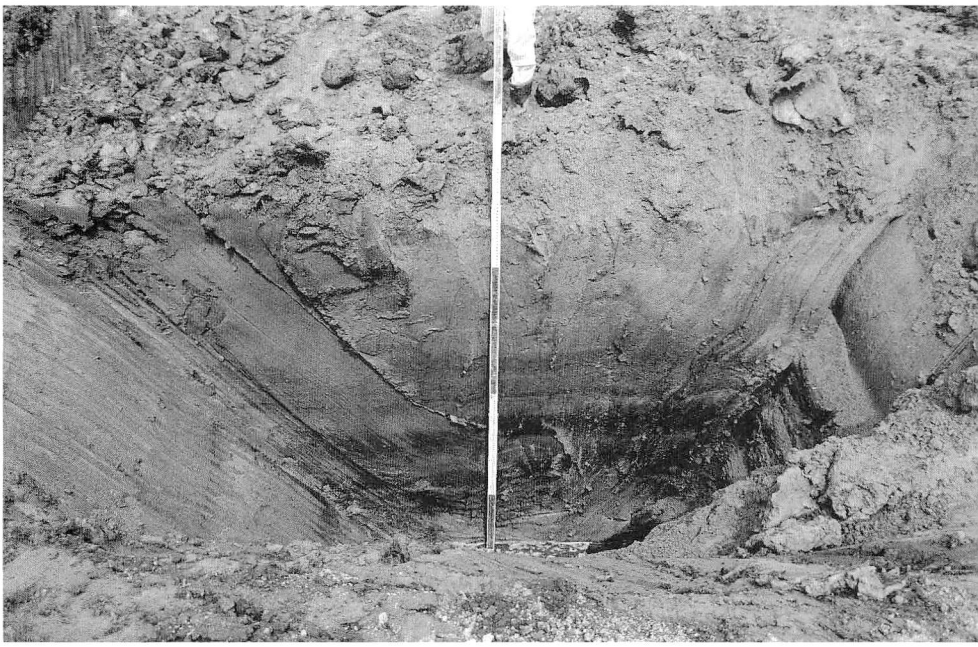


スクリーントーンは遺跡の範囲

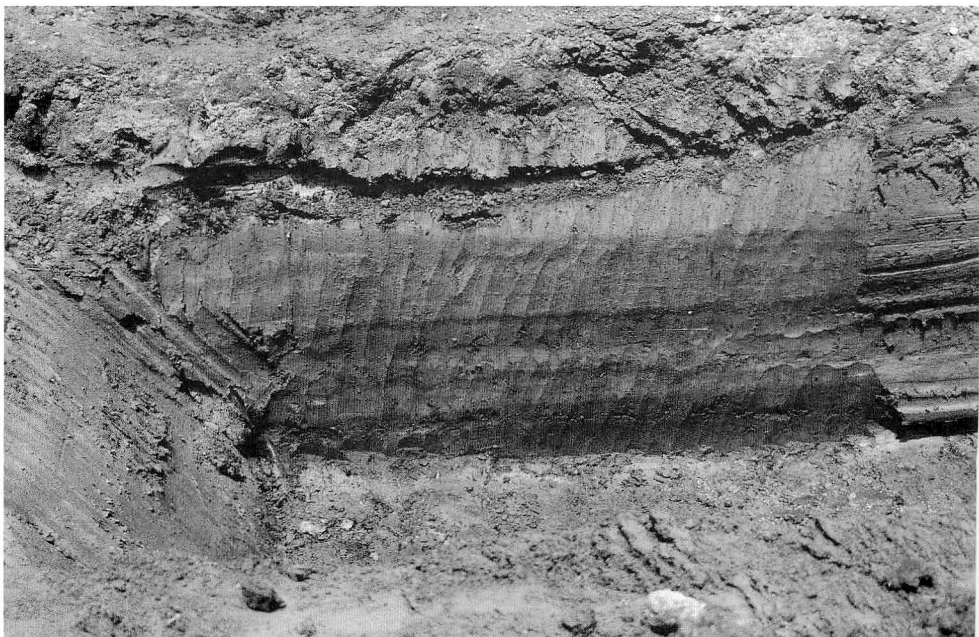
第5図　遺跡範囲の推定図(1/800)

（付編）図版１

遺跡近景（南から）



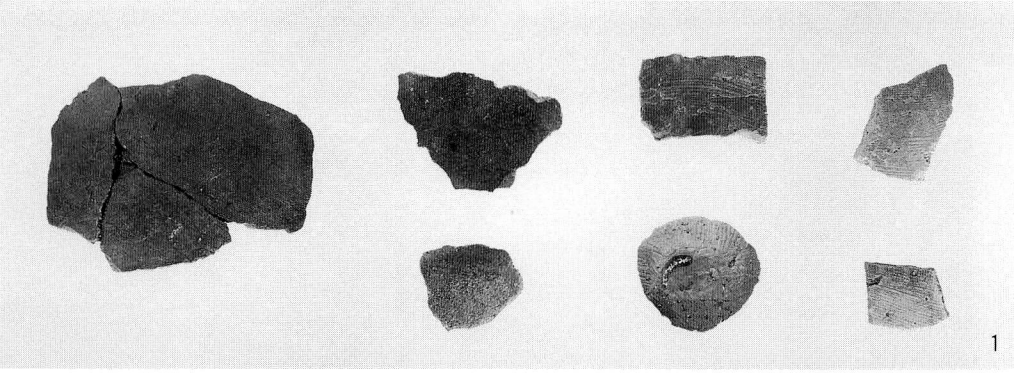
試掘坑 No. 1 土層



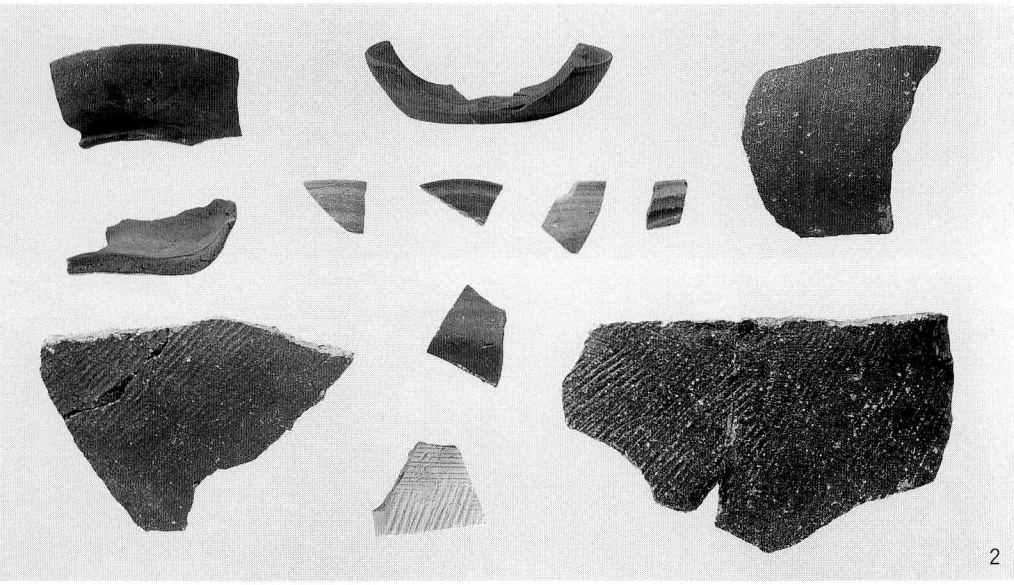
試掘坑 No. 3 土層

(付編)図版 2

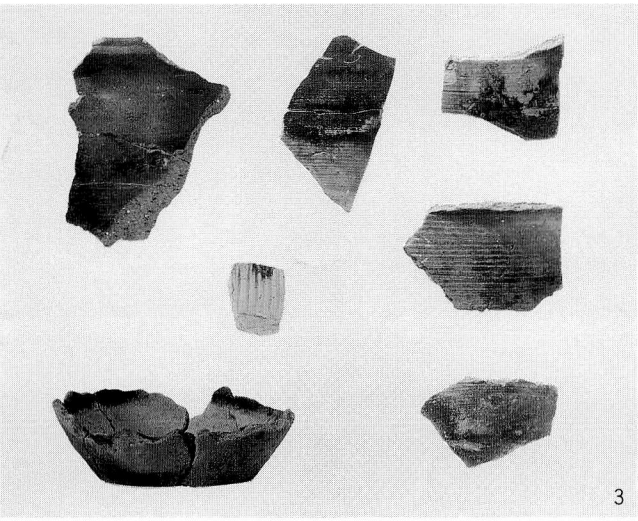
(4 以外すべて1/3)

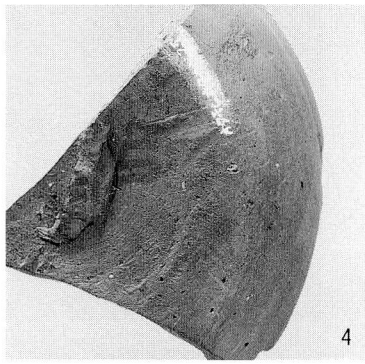


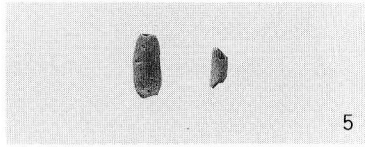
1　古代土師器



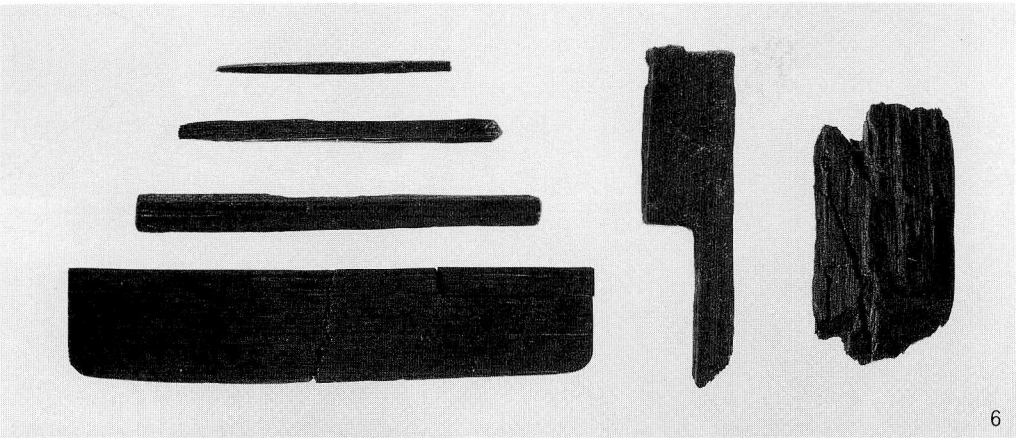
2　須恵器







3　左　土師器
(奈良～平安時代)
4　右上　墨書土器拡大
5　右下　土錘



6　木製品(中世)

緒立C遺跡発掘調査概報

1993.3

発　行　黒埼町教育委員会
新潟県西蒲原郡黒埼町大野2843-1
〒950-11　TEL (025)377-3101

印　刷　長谷川印刷
新潟県新潟市小針1丁目11-8
〒950-21　TEL (025)233-0321

『緒立C遺跡発掘調査概報』正誤表

頁	行	誤	正
付編3	下から　8	アームが達く深さまで	アームが届く深さまで
付編6	上から　3	多くの甕類	多くは甕類
図版6		古式土師器1	古式土師器1（約⅓）
図版7		古式土師器2	古式土師器2（約⅓）
図版8		古式土師器3	古式土師器3（約⅓）